

勉強会 (BENGKEL) 報告書

1. 勉強会 (Bengkel) 指導の動機

PELDAの幼稚園は、ASDOの判断により長期休み期間中に、または毎月定例として勉強会を実施してきた。しかし、毎月定例に勉強会を行なっているところは少なく、しかも勉強会の内容は教材作りに重点が置かれているため、教師の知識や経験を増やし保育技術の向上を計ることのできるような勉強会はあまり実施されていなかった。

これは勉強会を主催するASDOの職務が社会開発部門全体を管理するため幼児教育に関しての専門知識がない。その為、幼稚園の状況や教師の現在の問題点等を把握できず良い勉強会を開くことができなかった。以上の理由により、JOCV幼稚園教諭隊員は教師の保育技術向上を計るため、地方事務所の協力を得ながら勉強会の定例化、講習内容の企画・指導等を行なった。

2. 目的

- ・ 幼児教育の意義、重要性を教師自身が理解する。
- ・ 保育の質、教師を高める為教材作りだけでなく保育の内容を掘り下げ、教師自身が考えて実践する応用力を養う。
- ・ 幼児教育に関する知識を、自分達で学んでいく態度を養う。

3. 勉強会 (Bengkel) 実施記録

* 隊員の活動地区と期間

No	地区	州	名前	活動期間
1	Tenggaruh	Johor 州	村上 浩美 (63年1次隊)	1988. 7 - 1990. 7
2	Jerantut	Pahang 州	鈴木 正代 (63年1次隊)	1988. 7 - 1990. 10
3	Umas-Umas Sahabat	Sabah 州	田中知勢子 (63年1次隊)	1988. 7 - 1991. 7
4	Palong Serting	Negeri Sembilan 州	坪川 紅美 (63年2次隊)	1989. 7 - 1991. 12
5	Pahang Barat	Pahang 州	伊東 里実 (平成元年2次隊)	1989. 11 - 1991. 11

1) Jerantut 地区 (鈴木正代)

期日	場所	内容	問題と対策
1988.12.27	Lepar Utara 1.5.8	討論 “新年度にあたり新入児の迎え方” ・ 数指導についての興味の引き方 ・ 体育 ・ 折り紙 ・ おやつについて ・ 園の環境整備	勉強会の課題についての準備を各教師がしてこなかった。 ↓ 十分な準備ができるよう勉強会の年間計画を立てる。 できればASDO, SDAも勉強会で見本を示す
1989.03.18	Lepar Utara Kota Gelanggi	討論 “幼稚園 (保育上) の問題点” [幼稚園のプログラム作成]	教師は保育の問題点をよくわかっておらず、園児側の問題だと思い込んでいる。 ↓ 問題点の原因は保育の仕方や家庭側にもあるので、問題解決の為には園側と家庭側の協力が必要。
04.22	Lepar Utara Kota Gelanggi	Hari Raya (断食明けのお祝い) の迎え方。 ・ カード製作 ・ 室内装飾	教師は自分で考えようとせず、常に受身である。 ↓ 勉強会で、アイデアや知識を交換したり増やしたりする為にはJOCVが教えるだけでなく、教師が勉強会の指導を経験する必要がある。
06.24	Lepar Utara Kota Gelanggi	人形製作 (教師が指導する) ・ 人形を使った実技発表 (人形劇、お話、園児の興味の引き方等)	人形製作には時間がかかった、宿題にすると仕上げてこない。

06.25 06.26		<p>実技指導 “体育遊び”、“遊具作り” “音楽（新しい歌を習う、歌を録音）”</p> <p>指導案（週案、日案の修正） 講演</p>	<p>自分で考えず他の教師のアイデアを真似する教師が何人かいた。</p> <p>↓</p> <p>幼児教育の知識が豊富な人の講演を聴く 教師自身教育関係の本を読んで勉強する</p>
08.25		<p>実技指導 “絵画製作”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 折り紙、招待状、卒園式、運動会のプレゼント作り。 	<p>参加者を乗せた配属先の車が、開始時刻まで到着しない。</p> <p>↓</p> <p>各入植地の所長及び運転手に勉強会の重要性を理解してもらう。</p>
11.29 11.30		<p>指導案立案 (従来の週案、日案の修正、新しい指導案の立案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導法... 数指導について。 	<p>毎年同じ指導案を使って指導している。</p> <p>↓</p> <p>園児の状態は、毎年異なる上社会も発展しているため、その年の園児に適切な指導をたてることがのぞましい。</p> <p>教師の知識を増やす為、他の幼稚園の視察をする。</p>
1990.02.27 02.28	Temerloh	<p>園児の指導要録作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 体育遊び ・ 絵画製作 ・ 歌 ・ 人形製作（伊東里実隊員が指導） 	<p>教師からの意見が少ない。</p> <p>勉強会の時間が足りず仕事が仕上がらなかった。</p> <p>↓</p> <p>勉強会の内容が多すぎるので、時間内に仕上がるような計画を立てる。</p>
03.01 03.02	Pahang Barat Daya	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育遊び ・ 絵画製作 ・ 歌 ・ 教材作り 	

2) Sabah州 Umas-Umas 地区 (田中知勢子)

期 間	内 容	問 題 点 と 対 策
1988.11	<p>新年度用の教材作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数 … ワークブック ・ 言語 … ワークブック、絵カード、文字カード ・ 室内遊具 	<p>SDAの協力が得られず、教材作りだけしかできなかった。</p> <p>↓</p> <p>勉強会の内容について、SDAと教師と一緒に話し合いをする必要がある。</p>
1989.01.28	<p>園児の健康管理について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 身体測定の実施にあたって測定法等指導 ・ 身長計作り 	
1989.02.11	<p>教材作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 廃品（ダンボール箱等）を利用した教材 <p>歌の指導</p>	<p>新しい幼稚園ゆえ教材が不足している。その為勉強会の内容は教材作りが多い。</p> <p>↓</p> <p>徐々に教材作り以外の内容を取り入れていく。</p>
04.10	<p>教材作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 数、文字指導のカード、ポスター 	
04.22	園児の指導要領作成	指導要領の必要性について、教師の理解が十分でない。
05.20	園児の保育中における役割分担、活動（当番）について	話し合いの際、教師の意見が少ない。

06.17	話し合い“卒園式について”(内容、計画)	教師の経験が浅いこと、勉強の場がないことが原因と考えられる。
07.25 07.28	教材作り ・ 言語領域 ・ 自然	↓ 幼児教育の基礎(幼児の発達段階等)に関する勉強会を計画する。
07.27	講話(宗教関係の社会開発員による) “望ましい教師の資質”	↓ 保育や、教師の質をより高めるためには講話等を取り入れる。
07.28	廃品利用の教材作り ・ 折り紙 ・ 新しい歌の指導	
08.27	教材作り ・ 折り紙 ・ 新しい歌の指導	
09.09	保健 “虫歯予防” ・ 歯について、歯の磨き方の指導	
09.29	幼稚園視察研修	他園を視察して良い点を学び、自園の弱点を知り今後の保育の参考にする。
11.28	教材作り ・ 数、文字指導のカード	
12.18	“紙芝居”発表会 ・ 教師自身が作った紙芝居の実演 ・ 紙芝居の読み聞かせ方についての指導	紙芝居の読み聞かせ方は、まだ上達してないので今後このような機会を設ける。
12.19 12.20	教材作り ・ 室内遊具 : 布地で果物、野菜を作る。	教材の活用法を教師自身考えて、保育に利用できるようにする為の教材研究が必要。
1990.01.08 01.09	教材作り ・ 室内遊具 : 布地で果物、野菜を作る。	
02.26	指導案作成 教育省発行“就学前教育カリキュラム指導書”に基づき各教科の年間指導案作成 ・ 国家組織 ・ 道徳 ・ イスラム教 ・ 身体的発達	保育の質を高めるためには教師自身が考え、討議し指導案を作るという勉強会は有意義。しかし、まだ考えを出すことに慣れていないのでこのような勉強会を継続する必要がある。
02.27	講話 “宗教について”(講師 社会開発担当者)	
03.01	講話 (講師 社会開発担当者) ・ 幼児の発達 ・ 情緒、身体について ・ 幼児の社会性	
03.02	・ 授業について ・ 指導案立案について(年間指導案の作成)	
05.14	教材作成 年間指導案作成 ・ 言語 ・ 知育 ・ 社会性 ・ 創造力	
05.19	教材 “パネルシアター”の実演と製作	地理的に孤立しているため、毎月1回だけの勉強会しかできず情報、知識に限界がある。

1 05.24	教材“パネルシアター”の実演と製作	↓ Felda Umas地区とSahabat地区の合同勉強会を計画する。
------------	-------------------	---

3) Sabah州 Sahabat 地区

<p>1990.09.08 体育、体操、踊りの指導</p> <p>09.22 絵画製作</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな手法による絵の描き方 ・ 折り紙 <p>11.20 Felda Umas地区とSahabat地区の合同勉強会 講話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の発達段階 ・ 就学前教育の目的 <p>11.23</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師の役割 ・ 授業について ・ 幼児に適した食物と食事について ・ 幼児の健康 <p>討論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 望ましい保育のあり方 (Video 「Felda Tenggaroh 5の幼稚園の保育、公開保育」を参考にする。) ・ 園児の父兄との協力活動について ・ 幼稚園の問題について (保育上、運営上) <p>保育演習 (模擬保育) 教材作り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人形製作 ・ 人形を使つての実技発表 (人形劇) <p>“手作り教材、遊具”発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各教師が自作の教材、遊具とその使い方を発表 ・ 各々の教材についての話し合い <p>1991.01.02 “集団遊び”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各教師が“集団遊び”を考え、発表それについての話し合い <p>04.27 “紙芝居”発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各教師が自作の紙芝居を発表 ・ 紙芝居、絵本の読み聞かせ方についての指導 <p>05.24 1991年2月1日からFeldaの幼稚園は、</p> <p>05.25 KEMASの管轄下に移管された。</p> <p>05.29 Kotakinabalu 地区の幼稚園教師の勉強会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽の基礎 ・ 歌 ・ 体操 ・ 教材作り 	<p>Sahabat地区は幼児教育の経験者がおらず、どの教科も基礎からの指導が必要である。</p> <p>初めて合同の勉強会が実現。 両園の教師は意見/アイデア交換ができ、良い経験になった。 双方のASDOの協力で、幼児教育に関する講話ができ内容的に充実した。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>今後も合同の勉強会を企画し、教師の知識、保育の質の向上に努める。</p> <p>勉強会の機会を設け教師の創造力を養う。</p> <p>現在行われているKEMASの勉強会は、教材作りに重点がおかれている。</p> <p>保育の内容や、教師の質を高める為に勉強会の内容を検討する必要がある。 例えば ~ 公開保育 指導法 幼児教育に関する講義</p>
---	--

4) Complex Palong 地区 (坪川紅美)

期 日	場 所	内 容	問 題 点 と 対 策
1989.04.01	Palong 11	話し合い ・園の美化 ・3ヶ月の仕事予定 歌の指導 教材作成	勉強会の計画はASDOが独自でたてているが、幼児教育に関する専門知識がない為、内容がパターン化している。 また教師の自主性、積極性にかける。 ↓ 勉強会の持ち方の指導を要する。
04.29	Palong 13	同上	
05.27	Palong 10	話し合い ・教授法 … 算数、国語 歌の指導 教材作成	↓ 教師の積極性を引き出す必要があるため次回から基本的な保育のあり方について話し合う。
06.17	Palong 9	話し合い ・教授法 … 体育 保育論 (JOCV) 園の美化活動	幼稚園教諭養成コースを受講した教師と受講していない教師の、理解度の差が大きい。 ↓ 実力に応じ3つのグループに分けて行う A) 養成コース受講済の教師 B) まだ受講していない教師 C) 教師以外 (SDA)
09.16	Palong 11	保育論 (JOCV) グループ別勉強会 A) 今年度のカリキュラムのまとめ B) 教材作り “ドミノゲーム” C) 今年度の会計報告	新しい試みなので、軌道にのるまで時間がかかることが予想される。 ↓ この方法を継続して様子を見る。
10.21	Palong 13	A) 教育指導要領と実行しているカリキュラムの比較 B) “ドミノゲーム”の利用法 C) 今年度の会計報告	徐々に軌道にのってきた。 ↓ 巡回指導の際、進行状況の確認が必要。
11.03	Palong 11	来年度の展望と保育方法の提案 (JOCV) 音楽 “縦笛、オルガンの練習”	↓ 日案、月案の改善、勉強会のあり方を話し協力を求める。
12.16	Palong 9	“おやつ”について (ASDO) “入園式準備について” (ASDO) 話し合い “12月の月案” グループ別勉強会 A) 幼稚園の問題点について討議 B) 教材 “ドミノゲーム”を仕上げる。 C) 新年度予算をたてる。	日案作成に慣れていないため時間がかかる。 ↓ 教材を作るだけでなく、どのように使うか実習が必要。

第一期 勉強会

- 状況 …… 毎月1回開かれていることは評価できるが、内容がワンパターンの為、効果はあまりないように感じる。
- 問題点 …… 勉強会を主催しているASDOは、幼児教育の知識がなく機会的に開いている為、効果のあるプログラムを立てることができない。
- 対策 …… 教師の中で幼児教育に関する知識も大きな差があり、状況に即した勉強会が必要。
まず始めに幼児教育の大切さを指導。その上で下記の3つのグループに分け、状況にあった課題を与える形式の勉強会を行う。
A) 幼稚園教諭養成コース受講済の教師
B) 幼稚園教諭養成コースをまだ受講していない教師
C) 教師以外 (SDA)
- 効果 …… 受身の勉強会に慣れた教師にとって、自分で考える形式の課題はかなり苦痛のようであった。しかし、確実に積極性が養われてきた。

- 5) Complex (A) Palong 1-3, Pasir Besar
 (B) Palong 4-8
 (C) Palong 9-13

- * ASDO、教師等は自分達で、質を高めることのできる勉強会を実施していく力が無いので、隊員の活動の重点を勉強会の指導におくことにする。
- * 従来行ってきた勉強会の内容が活かせるよう、月案の導入と日案の改善を図る。
- * 勉強会の新しい試みとして公開保育を行う。別添「公開保育報告」参照。

勉強会の基本的内容

- ① ASDOからの話
- ② 月案の作成
- ③ JOCVによる講話、デモンストレーション
- ④ 教材、教授法研究 … 教師の学びたい事を課題とする。

Kompleks A

期 日	場 所	内 容	コ メ ン ト
1990.02.03	Palong 1	誕生会の持ち方 (方法、カード、プレゼントお祝いの歌等)	経験豊富、良い資質の教師が多いが、お互いに高めるといふ気持ちに欠け、全部JOCVに教わるプログラムを立てていた。
03.07	Palong 3	リズム体操	
04.04	Palong 2	製作、折り紙	

Kompleks B

1990.03.10	Palong 4	誕生会の持ち方	1つの園の規模が大きい為か、教師は容易な方に流れ安く指導がしにくい。
03.31	Palong 8	製作	
05.28	Palong 4	歌	

Kompleks C

1990.02.10	Palong 10	教材作り (果物、野菜)	数々の摩擦はあったが、みんなで伸び合う力、幼児教育に対するプロ意識が生まれてきた。
03.24	Palong 13	人形製作 健康に関する歌	
04.07	Palong 11	集団ゲーム 劇遊び	
06.30	Palong 12	体育遊び	

第二期 勉強会

- 状況 …… 3つのコンプレックスの勉強会を巡回指導
 ・ねらい
 保育に対する勉強、即戦、応用がうまく噛み合うこと。その為には教師の積極性が不可欠だが話し合うことに慣れていない為、ペースを掴むまで時間がかかった。
- 問題点 …… 教師達は新しい知識を求める気持ちはあるが、勉強会で得たことを日々の保育の中に有効に使っていない。
- 対策 …… 勉強会のフォローアップとして巡回指導を行い、勉強会で得たことを保育の中で活かしているか視察し、勉強会で行ったことを定着させる。
- 効果 …… 短い期間だったので効果が目に見えるまでには至らなかった。
 しかし保育へのプロ意識が育ってきているので、回を重ねる度に、教師が積極的に勉強会に参加するようになった。

6) 地方事務所主催の勉強会 (長期休み中)

* Palong 地区		
期 日	内 容	問 題 点 と 対 策
1989.08.01	連絡事項 リズム体操 小麦粉粘土作り 集団ゲーム「ジャンケンによるいろいろなゲーム」	教師達は積極的に参加しており基礎知識もある。 実習の時間があまりとれなかったので、次回からは実習の時間を十分とる必要がある。
08.02	講話・「1日の活動の中に いかにして子供を巻き込むか」 講師：中央訓練所講師 ・「子供の発達」 講師：教育担当 ・「子供の発達」 講師：講習終了後の教師	講話内容は大変良い。 ↓ 講話についての討議が必要。 講習終了後の教師による講話は適切であるが疑問を感じる。
11.01	各科目の目的について 講話・「歯の予防」 ・「救急医療」	
11.02	教育指導要領の目的について	ASDO対象の幼稚園講習会の効果があり、ASDOの理解が深まりコメントが適切になってきている。 Videoの活用は、JOCVの語学力不足を補う面があり有効であった。
1990.02.26	公開保育を実施するにあたっての説明 討議「良い保育とは？」 (Video 'Pelda Tenggara 5幼稚園の保育' 参照)	
02.27	教材作り ・ ペープサート作りとその使い方 ・ ペープサート実演	ペープサートが完成しなかった園が多い。 ↓ 各園に持ち帰って仕上げ、JOCVが巡回指導時に実践する。
* Serting, Serting Hilir 地区		
1990.05.15	公開保育を実施するにあたっての説明 討議「良い保育とは？」 (Video 'Pelda Tenggara 5幼稚園の保育' 参照)	
05.16	話合い「保育に関する新情報」 (講演を終えた先生より) 講話「子どもの発達」 講師：LPPKN職員 (国家家族開発局)	
09.25	他の幼稚園見学 “環境設定について”	
09.26	講話「子どもの社会性の発達」 講師：JOCVシニア 教師の資質について 日案の改善点について	幼児教育の、基本的なことを学ぶ機会のないSDAにとって、良い研修の場となった。
1991.05.11	話合い “幼稚園における問題点について” 保育室の整備	
06.06	Video鑑賞 “保育のあり方について” 教材 “パネルシアター” 作成 パネルシアター実演	JOCV編纂によるVideoは、具体的で教師がわかりやすい内容である。 また、教授法の参考となるだけでなく、子供への接し方教師のアイデア等、多岐にわたって示唆を与えることができる。 パネルシアターの活用法を想定しながら製作に取り組めた。

- 教師の状態 …… 基本知識はあるがそれが活用されていない。これは、幼稚園教諭という職種の社会的地位づけが低いため、教師に発言の機会が与えられていないからである。
- 保育に対する姿勢 …… カリキュラムをこなすことに重点がおかれ日々の保育についての反省がないため、保育が発展しない。
- 子供の心をとらえることの重要性をよく認識しておらず、一人一人に応じた指導がされていない。
- 政府が打ち出している「勉強しながら遊ぶ」という概念は、教師の中に浸透しつつある。
- 問題点 …… 勉強会で学んだことを応用しようとする努力が足りない。
又、どのように応用したらいいのかを学ぶ機会も少なかった。
- 対策 …… 保育の改善を意識していけるよう題材に沿った実習や、公開保育のように他の教師の保育を見る機会を設ける。
- 課題 …… 勉強会を主催する側（地方事務所）に望むこと。
① 幼児教育の理解の促進
② 教師の能力を引き出すことを重点にし、どのように実践するか
-] を柱に勉強会を企画する。

7) Pahang Barat 地区 (伊東里実)

期 間	場 所	内 容	問 題 点 と 対 策
1990.09.29	Triang 3	話し合い “勉強会のあり方について” Video鑑賞 (Felda Tenggaroh 5の保育) 公開保育の行い方 討議 “今後の勉強会のあり方について”	教師は自分の考え、意見をあまり言わず 社会開発委員の意見に従うだけである。 ↓ 勉強会における教師の自主性を高める。 * Videoは参考資料として具体性があり 有効である。
1990.10.16	Sebertak	話し合い “勉強会のあり方について” Video鑑賞 (Felda Tenggaroh 5の保育) 公開保育の行い方 討議 “今後の勉強会のあり方について”	
11.19 11.20	Mayan	グループ討議 “新年度準備、新入児の受け入れ について” 音楽 ・ 楽器作り ・ 実技 (作った楽器、現在ある楽器を使って)	新年度を迎える前にこれらの準備は必要 教師は、楽器をあまり利用していなかつた。 ↓ 有効利用できるよう基本リズムから指導する。
1991.01.26	Bukit Damar	年間計画立案 …… 1991年度の勉強会 Jenderak 地区の訪問のまとめ 幼児教育について (Videoを参考にする) ・ Felda Tenggaroh 5の保育 ・ 公開保育の行い方 ・ 日本の幼稚園の保育	年間計画は見通しをもった保育をするため、また運営を円滑に行うために必要。 ここの地区でも公開保育を実施するにあたり、Videoを参考に説明する。

4. 公開保育実施報告 (保育研究会)

1) 動機

FELDAの幼稚園では教師の勉強会を実施している。

しかし従来の勉強会は教材作りに重点が置かれていた。

幼児の指導、及び教師の質の向上の為には日々の保育を充実させることが重要である。それを学ぶ場としてJOCVは公開保育 (保育研究会) を企画。

2) 効果

① 教師は指導法、新しいアイデア、子供への接し方を学ぶことができる。

② 教師自身、自分の活動 (指導) を評価することができ、自分の弱点がわかる。

③ 教師同士意見や考えを交換する。

④ 指導の方法を幅広くする。

⑤ 知識や経験をふやす。

⑥ 保育の場で使われている教材や遊具等を見ることができ、それについての子供達の反応がつかめる。

⑦ 幼稚園の問題解決について話し合うことができる。又保育に関しての知識を交換することができる。

3) 問題点及び対策 (経過を含む)

① 公開保育を観るポイントがわからず、漠然と注意を払わず観ている教師が何割かいた。

それ故、保育後に行われる保育研究会 (保育についての話し合い) の際意見が少ない。

対策 : * 観察する側の教師等は公開保育をよく観て、保育内容や子供の状態等について質問する必要がある。

* 特に新任の教師、経験が少なく知識が乏しい教師は、自身の資質を高めるために他の教師の意見や考えを聞いて参考にする。

* 公開保育を実施する前に公開保育を行う意義を説明し、保育を観察する際のパポイントをおさえる。(観察の視点を明確にした、記録用紙を参加者に配布する。)

* JOCVが編集した“公開保育”のVideoテープを説明の際に活用する。

② 社会開発担当 ASDO、SDAの中には公開保育中の私語がうるさく、保育や園児、他の参加者に迷惑をかける人がいる。

対策 : * ASDO/SDAは直接園児を教える立場ではないが、幼稚園の担当であり教師に対しての助言を行う立場にあるので、幼児教育に関する勉強が必要。

又、話し合いの際、ASDO/SDAは建設的な意見、アイデアを提供すべきで、教師等を批判するような発言は避けるようにする。

* 保育の質を高めるためにASDO/SDA及び教師、3者の協力が必要。

③ 会場への参加者の交通手段として配属先(FELDA)の自動車を利用。しかし、その自動車の到着がしばしば遅れ公開保育を観察できない参加者もいる。(時間に関してルーズである)

対策 : * 参加者全員、開始予定時刻に会場園に到着するべきである。

各所長やASDOに公開保育、勉強会の意義と重要性を理解してもらい、幼稚園教育の質を高めるために協力を要請する。

4) 今後の課題

保育の質を更に高めるために、JOCVが引き揚げた後も公開保育の勉強会を、ASDO/SDA /教師等の手によって継続させる。

5) 公開保育実施記録

A. Tenggaraoh 地区 (村上浩美隊員)					
		参加者			
期日	場所	ASDO	SSD/SDA	教師	備考
1989.03.11	Tenggaraoh	1	8	全員	
05.27	"	0	0	"	
06.24	"	0	1	"	
07.08	"	0	1	"	
08.26	"	0	2	"	
10.07	"	0	1	"	
1990.02.17	"	1	全員	"	
03.19	"	0	全員	"	

B. Kota Gelanggi/Lepar Utara/Pahang Barat Daya/Temerloh (鈴木正代隊員)					
1989.05.09	Pahang Barat Daya	1	5	全員	
1990.01.19	Lepar Utara				
	Kota Gelanggi	2	6	"	
02.09	Kota Gelanggi	2	4	"	
02.16	Lepar Utara	0	2	"	
03.16	Lepar Utara				
	Kota Gelanggi	1	2	"	
04.07	Lepar Utara				
	Kota Gelanggi	1	6	"	
C. Sabah 州 Umas-Umas 地区 (田中知勢子隊員)					
1989.03.18	Umas 2	1	3	4	
07.01	Umas 3	0	2	5	
08.26	Umas 1	0	0	5	
1990.02.17	Umas 5	1	2	7	
04.07	Umas 2	0	2	7	
06.23	Umas 5	0	3	7	
D. Palong , Serting 地区 (坪川紅美隊員)					
1990.03.01	Palong 4		-	37	
06.09	Serting 1		-	23	
06.16	Palong 3		2	8	
06.23	Palong 8		-	12	
07.14	Serting Hilir 6		-	23	
1991.05.04	Palong 1		-	35	
E. Pahang Barat 地区 (伊東里実隊員)					
1991.01.12	Triang 3		5	8	
01.19	Rentan		5	8	
02.02	Bukit Kepayang		5	11	
02.09	Kumai		5	14	

5. 勉強会全体を通じた問題点

教師・・・勉強会の準備をしてこない。

受け身の勉強会に慣れていて自分で考えず他の人の真似をする、話し合いに自分の意見を出さない等
自主性や創造性に欠ける。

原因 → 幼児教育に関する知識や経験が十分でない。
従来の勉強会は教師が考える機会が少なく受け身だった。

6. 対策

幼児教育に関する基礎的な知識を養う為、幼児教育についての講話を取り入れる。

教師の保育技術の向上を計る為、公開保育の開催、指導案のたて方の講習、個々の園児への対応の仕方等教師が主体的に講習会に参加することができる内容を取り入れる。

(細かい問題点对策は、各隊員の活動記録の中に有る為此の項においては省略する。)

幼兒教育啓蒙活動

セミナー“幼児教育の日”に関する報告書
テーマ： 子供は未来を創る

マレーシア

青年海外協力隊幼稚園教諭隊員
(1990.12)

企画書

「幼児教育の日」

現地語: Hari Pendidikan Kanak-kanak

目的;日本の幼児教育の紹介を通じ幼児教育の重要性と理解を深めるため。

マレーシア国における幼児教育活動も10年が経ち現地レベルでの活動も現地人の力で運営・教育活動を行なうことができるようになった。JOCV幼稚園教育の最終段階の活動のひとつとして、JOCV主催による「幼児教育の日」を企画した。

この企画の経緯として、これまでの活動で現地の幼稚園教諭の質の向上はめざましく目標達成間近となっている。しかし幼稚園教諭の社会的地位の低さ又父兄の幼児教育に対する理解の低さ等幼児教育の重要性に対する知識の少なさが教育活動の上で大きな障害となっている。しかしながらマレーシア国において、幼児教育の重要性、幼稚園教諭養成機関設立の意向とが現在少しずつ打ち出され始め、幼児教育への理解も深まるかも知れないという状況にある。そこで私達はその理解の一層の発展を進めるため、日本の幼児教育の紹介及び、今まで隊員が作ってきた教材、教具の紹介を通じて、つめこみ的学習が主体の現在のマレーシアの幼児教育に対し社会性、情操教育を重視した日本の幼児教育のあり方を示す。又幼稚園教諭養成機関設立の必要性等、マレーシア国内に於て幼児教育の重要性に対する啓蒙を行いたいと企画した。

配属先との話し合いで決定した目的は以下の通り。

1. 幼児教育の重要性をマレーシア社会に啓蒙する。
2. 日本の幼児教育の技術方法を(映像によって)マレーシアの人々に紹介する。
3. 現在のマレーシアの幼児教育の方法、技術を検討する。

日時 : 10月27日 土曜日 午後2時-6時

主催 : JOCV幼稚園教諭

場所 : クアラルンプール市内のホテル

対象者: マレーシア幼児教育に携わる人々

応援 : 保母、福祉隊員

後援 : JOCVマレーシア事務所

記

- 1・開催日時 : 1990年10月27日 (土) 14:00 ~ 18:00

- 2・場所 : Malaysia International Youth House.
(M. A. Y. C, Wisma Belia, クアラルンプール市内)

- 3・参加者 : 約 200名
 - ① FELDA 訓練局訓練課長 ニック ザイナブ 女史
 - ② 教育省 カリキュラム課 ハジャ・ナエマ女史
 - ③ 在マ日本大使館 伊藤友孝二等書記官 (協力隊担当)
 - ④ 協力隊技術専門委員 前田美知子氏
 - ⑤ FELDA、 FELCRA、マラヤ大学、マレイシア農科大学、マレイシア国民大学、マレイシア石油公団等
 - ⑥ 幼児教育関係者 約160名
 - ⑦ 隊員等、JICA、 JOCV関係者 20名
 - ⑧ 報道関係者 UTUSAN MALAYSIA (マレイ語紙) 記者 4名

プログラム

1. 挨拶 (5分) 日本大使館書記官挨拶
2. 挨拶 (10分) 教育省カリキュラム局 ハジャ・ナエマ女史
3. フィルム上演 (90分) 日本の幼児教育の様子、説明と講演、質疑応答
(前田美知子 技術専門委員)
4. 実演 (30分) 大型紙芝居、ペープサート、パネルシアター
5. 休憩、軽食 (20分) 抽選
6. 挨拶 (10) FELDA訓練局訓練課長 ニック・ザイナブ女史
7. 挨拶 (10分) JOCVマレーシア駐在員 駒沢彰夫氏
8. 各展示コーナーへ移動

- 展示：1. 日本人学校附属幼稚園の子供達による絵画製作
2. ビデオ上演(流しておく) マレーシアの保育の様子
日本の保育の様子
3. 手作りの教材・教具・遊具

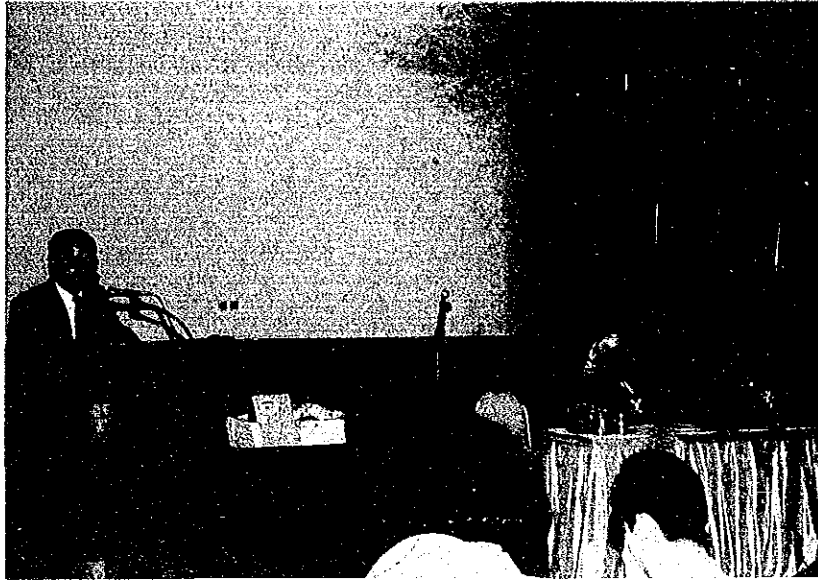
- ※ 展示コーナーは、招待者が集まるまでの間と講演が終了してから約30分自由に見学して貰う。 幼児・児童同伴で来ることも予想されるので、講演中に子供が絵画・折り紙・粘土遊びをできるコーナーも設置しておく。
- ※ 招待状に抽選券を印刷しておき、抽選により手作りの教材を景品としてプレゼントする。

経過

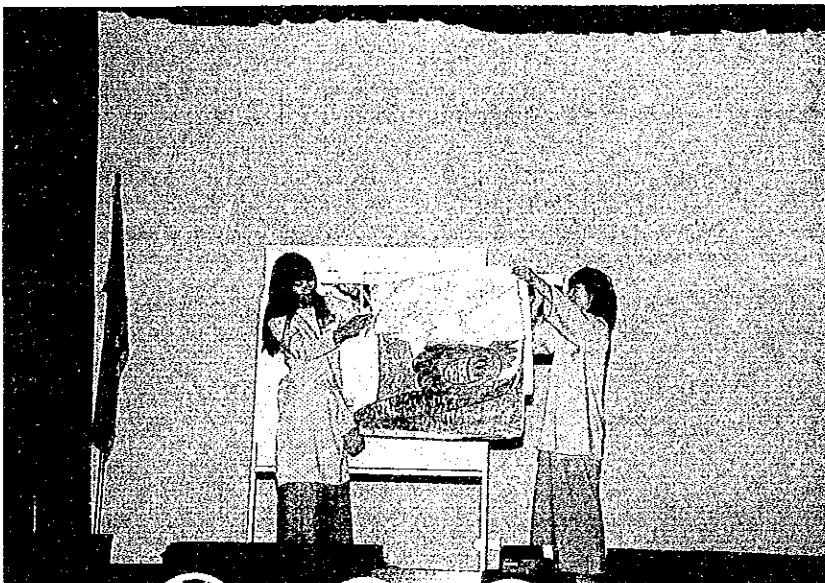
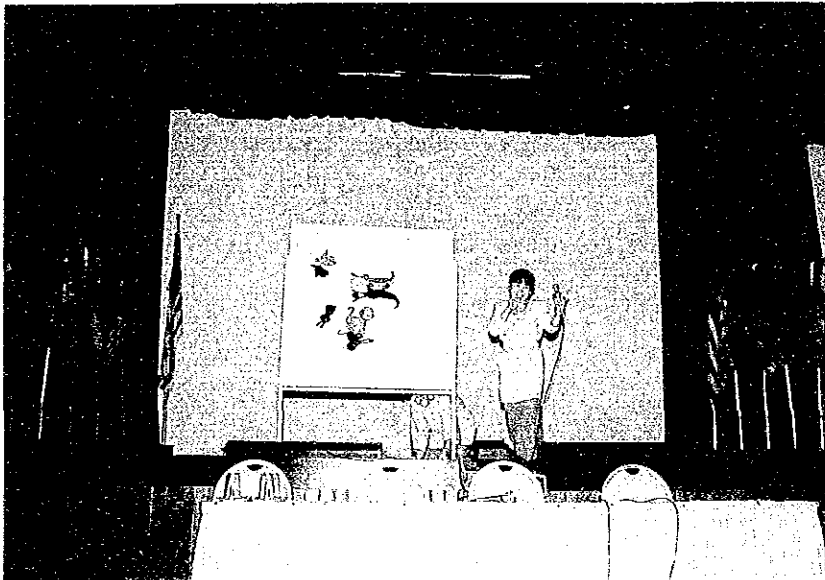
	経過	備考
1990年3月 5日	職種別会議時にマレーシアにおいて幼児教育の啓蒙を図るため、シンポジウムを開催したい旨を話し合う。	-前田技術専門委員、浜田国担当へシンポジウムのあり方・行い方について打診
4月16日	シンポジウムが実現可能であるか検討（方向性を含め）	
5月24－ 25日	<p>駒沢駐在員とシンポジウムについての検討</p> <ul style="list-style-type: none"> *シンポジウムの主旨・内容説明 *マレーシア国の社会状況からみた検討 <ul style="list-style-type: none"> -幼児教育の必要性が新聞等で説かれたしており、時期的には良い機会である。 -シンポジウムという形ではマレーシアの教育政策に踏み込まざるを得ず、JOCVの活動として不適である。 -マレーシア社会は縦社会であり、横のつながりはなく、呼びかけに集まるとは思えない。 -所属するFELDAが民営化移行のため、協力を得ることができない。 <p>以上の4点をふまえ規模を縮小し、JOCV主催で日本の幼児教育の紹介を中心としたイベント（セミナー）を開くことを決定する。</p> <p>おおまかな内容・役割分担を決める。 （金城シニア・鈴木両隊員を中心に準備を進めることになる）</p>	<ul style="list-style-type: none"> -会場探し（金城、鈴木） （100人収容できる場所） -発送リスト作成（金城）
6月9－ 10日	5月24日の内容をもとに、金城・鈴木がプログラムのたたき台・企画書を作成（企画書を参照のこと）	

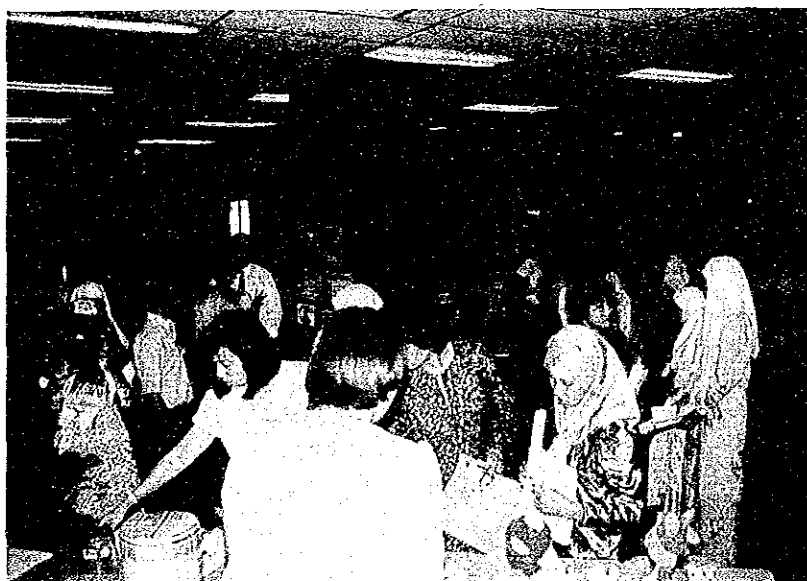
7月6日	<p>企画書をもとにプログラム検討</p> <ul style="list-style-type: none"> *オープニングの「日本人学校附属幼稚園園児による唄・合奏」は事故等の責任問題上、再検討 *映画上映「アリサ」は予算・時間の関係上やめ、前田技術専門委員推薦の映画に変更 *広報としての新聞広告の利用は効果の面、また対象者がつかめないため行なわない。 *各コーナーの責任者を決める。 *ポスターの検討 <ul style="list-style-type: none"> 子供の絵を使う テーマ：「子供は未来を創る」 —就学前教育について共に考えましょう— 	<ul style="list-style-type: none"> -招待状・プログラム作成 -アンケート用紙作成 -事前の日程作り -予算案作り
7月18日	東京事務局側にセミナーの企画書送付、前田技術専門委員の派遣依頼	
7月26日	駒沢駐在員よりFELDA側にセミナーについての説明、及び開催についての承認を求める。	<ul style="list-style-type: none"> -ポスターデザイン依頼（佐藤隊員） -前田技術専門委員より映画「幼稚園」の台本・テープが送られ翻訳作業開始 -前田技術専門委員より8mmフィルム送られてくる -ポスター印刷 -会場Wisma Beliaに決定
9月10日	前田技術専門委員派遣正式決定 日本人学校の園児の出演を断念 サバの幼児教育関係者1名を事務所負担で参加させる。	
10月		<ul style="list-style-type: none"> -10月4日招待状発送 -広報として日本大使館(Japan Information)を通しプレス・リリースを流す -映画「幼稚園」、「いいこといいこと考えた」の翻訳作業、司会の言葉作り -台本、司会の言葉をRazak先生(言語学)に添削依頼する

10月25日	事前準備をする 前田技術専門委員と最終打ち合せ	-遊具説明コピー、和紙人形作り、写真展示・スライド選択・デモンストレーション練習 -会場設定
10月27日	セミナー当日	









反省

a) 準備段階

- * FELDA、事務局から承諾を取るのが遅れ、準備活動の期間が短かった。(少なくとも6カ月前に)
- * 8mmフィルムが2カ月前に到着していたが機械の都合で見ることができず、台本と画像の確認を取ることが出来なかった。
- * 台本作りは一人では大変なので、時間がかかってもみんなで意見を出し合い、補足し、仕上げる方が良かった。メインのプログラムでもあることだし時間をかけるべきだった。
- * スライドの目的である幼児教育施設や養成機関の紹介がお願いした方々に明確に伝わっておらず、意図したスライドを集めることができなかった。また、帰国したばかりの村上OG一人に負担をかけすぎた。
- * 参加賞として和紙人形を作り配ることになったが、全体の中で話し合われていなかったために隊員間で徹底されておらず、当日間近になって作る結果となり他の仕事に影響が出た。
- * プログラムに誤字・文章の誤りが多くあった。

b) 当日

- * 会場は広さ、費用、場所については問題はなかったが、会場側の対応が悪かった。
 - 1日使用の契約をしたにもかかわらず、午後にセミナー開催ということで午前中に他の団体が入っており、リハーサルが全くできなかった。
 - 使用する機材に関しても、事前に連絡を取り確認を取っていたにもかかわらず、用意されておらず会場設定に時間をとるという結果になってしまった。
- * プログラムの流れとしては問題はなかったが、講師紹介をプログラムに挿入し前田技術専門委員の経歴・立場を明確にすべきであった。
- * 映画のナレーションを幼児教育関係者のマレイ人に読んでもらった方が良かった。
- * 質疑応答時は隊員が通訳を行なったため、明確に聴衆に伝わらなかった部分も多かったが、全体を通して見ると良かったのではないと思う。
- * 参加賞を最後に渡すはずであったが、出口が2カ所あったため全体に行き渡らなかった。
- * 展示コーナーは広さとしてすこし狭い感じはしたが、内容的には充実していたように思う。
 - 展示の仕方については、皆素人であることもあるが、効果的な方法等検討の余地があるのではないか。

- 絵のコナーは年齢、絵を見るポイントの解説がなかった。
- * 入口が2カ所あったため、受付の場所がわかりにくかった。
 - ペンがなくなる率が多かった。
 - 当日、プログラム抽選券を忘れた人が多かった。
- * Buku Aktivitiの販売で袋の用意をしていなかった。

c) その他

- * 関係機関への贈答を前田技術専門委員のご好意に甘えてしまったが、マレーシアの習慣上必要なものであり、予算組みしてもよかったのではないか。
- * イベントの効果的な実施の仕方についていろいろな方法の検討も必要ではなかったか。

以上。

アンケート集計

出席者 161名 回答 89名

1. 会場	適当である	84名	(94.4%)
	不適當	0名	(0%)
	無回答	5名	(5.6%)

コメント 特になし

2. プログラム			
a) フィルム上映	適当である	80名	(89.9%)
	不適當	6名	(6.7%)
	無回答	3名	(3.4%)
b) 質疑応答	満足である	53名	(59.6%)
	不満	25名	(28%)
	無回答	11名	(12.4%)
c) デモンストレーション			
パネルシアター	良かった	83名	(93.3%)
	良くなかった	0名	(0%)
	無回答	6名	(6.7%)
ペープサート	良かった	80名	(89.9%)
	良くなかった	0名	(0%)
	無回答	9名	(10.1%)
大型紙芝居	良かった	80名	(89.9%)
	良くなかった	0名	(0%)
	無回答	9名	(10.1%)

コメント

- * 質問に対する答えが不明確である。 13名
(言葉の違いが原因であると思う)
- * とってもおもしろくて良かった。 8名
- * パネルシアター、ペープサート、大型紙芝居は幼稚園での活動や子供の興味を引くのに適している。 7名
- * フィルムが不鮮明であった。 4名
- * よい経験、及び参考になった。 4名
- * フィルム—今回のフィルムはいいところだけを写しているが、できれば悪いところも写して説明しながら解決していくともっと良かったと思う。 2名
- * 質疑応答ではまだまだたくさんの質問があったが、時間の関係上全部取り上げることができなかった。 2名
- * 短い話は幼児に適當である。 1名
- * 絵が大きく、はつきりカラフルであった。 1名

- * 語彙も子供達に適切である。 1名
- * 自立や協力の概念と同時に子供達の創造性や精神発達の進歩が表現されていた。 1名
- * いろんな経験を交換することができた。 1名
- * フィルム-子供達の一日の活動を写してほしかった。 1名
- * フィルム-先生の教え方を写してほしかった。 1名
- * プログラムが長すぎて疲れた。 1名
- * ペーパーサート,大型紙芝居はもっとゆっくりやってほしかった。 1名
- * 絵を描いたときの背景を加え興味を増すような絵だともっと良かった。 1名

3. 展示

a) 日本の子供が描いた絵コーナー	良かった	76名 (85.4%)
	良くなかった	1名 (1.1%)
	無回答	12名 (13.5%)
b) ビデオコーナー	良かった	74名 (83.1%)
	良くなかった	3名 (3.4%)
	無回答	12名 (13.5%)
c) 玩具/教具コーナー	良かった	71名 (79.8%)
	良くなかった	3名 (3.4%)
	無回答	18名 (20.2%)
d) 遊びのコーナー (折り紙・粘土・絵画)	良かった	71名 (79.8%)
	良くなかった	0名 (0%)
	無回答	18名 (20.2%)

コメント

- * 新しい経験、アイデア、知識を増やすことができた。 5名
- * できればもっといろいろな違ったものがあると良かった 3名
- * 子供達の思考力、自主性、創造性をもたらす展示物であった。 2名
- * きちんと明確に展示された展示物にJOCV側の努力が見られる。 2名
- * コーナーの並べ方は興味を引かれた。 1名
- * 幼稚園にある様なコーナーが用意されると良いと思う 1名
- * 玩具/教具の作り方のデモンストレーションがもしあったならもっと良かった。 1名
- * 展示された玩具/教具は就学前の子供の知育を促すものばかりであった。 1名
- * 日本の子供の創造性を知ることができた。 1名

4. “幼児教育の日”に参加してのあなたの意見、感想をお聞かせください。

満足	79名 (88.8%)
不満	2名 (2.2%)
無回答	8名 (8.9%)

コメント

- * 幼稚園で就学前の子供を保育するための新しい知識と経験を得た。 18名
- * 度々こういう会を開いてほしい。(毎年) 16名
- * 質疑応答では満足する解答が得られなかった。 5名
- なぜなら日本語のマレイ語訳が理解できなかったため。

- * 日本の子供の成長の過程を知ることができた。 4名
- * もっと改善する必要がある。 3名
- * JOCVはもっといろいろな違う活動をするができると思う。 3名
- * 幼児教育の日に参加ができてとても嬉しい。 2名
- * このような会には教育概念を新たにするための話し合いや意見がいつも必要である。 1名
- * 座席の配置が公式すぎた。 1名
- * 時間を参加者に適当な時間にするのが良い。 1名
- * 展示品の中にはマレーシアに適当でないものがある。 1名
- * 子供の行動についてもっと詳しくのべるべきである。 1名
- * 時間を長くしてグループごとにいろいろな項目について話し合うと良い。 1名

5. あなたの幼児教育に対するご意見をお聞かせください。

コメント

- * 幼児教育は大切であり重要である。 21名
これは彼らが正しい就学教育の世界に向かうための事前準備である。
- * 幼児教育はとっても大事である。これは思考、態度、忍耐力、性格を形創る 16名
ひとつである。これは後に自分自身が何であるか知らせるための一人の人間としての精神形成の基礎である。
- * 小学校の一年に入るための準備である。 11名
- * 幼児教育は就学教育の前段階である。 6名
そこで子供達は学校に入る前に読んだり計算したりする基礎を得る。
- * 子供達にとってとっても大切であるなぜなら彼らは遊びを通して学び、 6名
創造力を発達させる為。
- * 幼児教育は成長途中にいる子供達の知育の発達のためにとっても大切である。 4名
なぜなら幼児教育を通して彼らはいろいろな活動や友達に自分自身を適応することを得るから。
- * 社会や父兄は幼稚園での教育概念を理解すべきである。 3名
- * 子供達が同じように養育される為、そして彼らが申し分のない国民になるよう 3名
教育省が管轄するのがとても大事だと思う。
- * すべての子供は就学前教育が必要である。 2名
- * 時代に応じてプログラムは改善される必要がある。 1名
- * カリキュラムは全マレーシアで統一される必要がある。 1名
- * 文字や数字を知る手段である。 1名

参加者より来た質問

1. 子供の評価はどの様にしているか？
2. 企業が独自でもっている幼稚園と文部省との関係
3. ユニホームについて
4. 家での学習について
親は家で子供に学習させる必要があるか？
5. どの様な方法で子供を指導すればよいか？
6. 日本の子供の幼稚園での一日を聞かせてほしい。
7. 幼稚園教諭になるために どの位どういう所で勉強すれば良いのか？
8. どの様にして父兄を巻き込んでいくのか？
9. 日本の子供は遊ぶだけで、何も教えないのか？(例えば、文字とか数字とか)
10. ハイウェイの下の遊び場は子供に悪い影響はないか？
11. 喧嘩について

その他にも、たくさんの方が質問を望んでいたが、時間の都合上、上の11項目の質問だけにした。質問の内容からすると、幼稚園に関してかなりの興味と技術を持っているものと思われる。

現在JOCVの考えているマレーシアでの問題点(どの様にすればより良い幼稚園にすることができるのか?)と一致する所が多く、できればその問題についてもっと掘り下げて話あいたかったが、時間の都合と、言葉の問題で断念した。しかしなんらかの形で意見交換をしていきたい。

新聞記事

11月3日 : UTUSAN MALAYSIA

(掲載記事 別添①のとおり)

* 日本の先生方は、幼児教育の教材、遊具を重視する。

守屋光子(28)協力隊は、指人形でどのように遊ぶかを子供に伝えている。彼女はセランゴール州 Kuala Kubu Bharu 希望の光園で教師を指導している幼稚園の先生である。

光子隊員は FELDA や FELCRA で 2 年間奉仕する協力隊メンバーの一人である。

その指人形は協力隊員の指導により全国の FELDA の保育園で使われている遊具の一つである。

FELDA における指導は 11 年にもなり、近々終わる。しかし FELCRA における活動は継続されている。

(注) 平 1 / 2 次 守屋隊員は、国民統一社会開発省(旧福祉省)所属の養護隊員であり、記事内容に誤りがある。当日は臨時託児所を手助けした。

11月5日 : UTUSAN MALAYSIA

(掲載記事 別添②のとおり)

* 幼稚園教諭が組織化されたプログラムを立てるのにより機会を与えた研修会

幼児教育についてのセミナーは 段階を追って行うべきである。これが 幼稚園教諭の教授法の質を高めるために 最も痕跡を残す第一歩である。JOCV が行った様なセミナー、あるいは他の短い研修を通して幼稚園教諭と一緒に話し合い そしてより組織化された幼児教育のプログラムを用意することが出来る機会を与えられた。

最近 KL の Jalan Syed Putra にある WISMA BELIA で JOCV によって行われた “幼児教育の日” のセミナーの多数の参加者へのインタビューを通して 幼児教諭達はあのような教育セミナーが必要であると実感した。

「全世界で以前からボランティア活動をしている JOCV は たくさんの技術を持っている。それを私達は真似るべきである」と Perak 州の Sungkai にある FELDA の研修所で幼児教育の講師をしている Siti Laila Abdul Karim さんは言う。彼女が言うには JOCV が使っている教授法 “勉強しながら遊ぶ” はもちろん就学前の子供に適切である。

それに幼稚園教諭は協力隊が示した製作物の作り方を学んだり、音楽を愛したりしなければいけないとも語った。

6 年前から幼児教育コースの講師をしているが、常に大勢いる彼女の生徒達が より完全な教授法を与えられているか確かめている。

セミナーの日もそうであった。

概念を知る

Nafisah Nayan(21) FELDA Mata Air, Padang Besar, Perlisの幼稚園教諭は語った。「私はJOCVの主催したセミナーに参加できてすごく得をした気分です。コミュニケーションで言葉の問題があったにもかかわらず、協力隊が私達の為に有益なセミナーを用意してくれたことを賞賛します。」彼女は協力隊によって示された幼児の為に数量の概念に興味を引かれた。彼女いわく、JOCVが奨励したドキュメンタリーフィルムのように遊びながら学ぶ数量の概念は 子供達の興味を引くのに受け入れ易い。さらにそれは数学の基礎と法則の概念について 子供達に一番簡単な方法を表している。

もう一人の幼稚園教諭Noor Faezah Samad(22)はこう語った。「幼稚園教諭はあのようなセミナーに参加すべきである。なぜなら、それぞれ自分が教育している子供達の創造力を高める手助けの為に彼女達はより多くの知識を必要だと私は考えるから。

また、創造力を持ち賢い子供を教育する為に 幼稚園教諭は子供の興味を引くような教材を一生懸命作りださなければならない。」彼女は子供の世界の中で教師の位置、概念がどこに置かれるかに興味をひかれた。なぜなら、ドキュメンタリーフィルムの中の教師達は子供達の中に入り込み、子供達がぶつかった問題をより簡単に解決しているからである。

そしてまた彼女は、このセミナーに参加したことによって自分達は子供達に負担をかけず新しいカリキュラムを考えながら子供への手助けがより容易になるだろうと語った。

セミナー“幼児教育の日”のテーマ“子供は未来を創る”に政府の教育関係者、FELDA、FELCRA、KEMASの幼稚園など170名が出席した。

地元の3つの大学（マレーシア農業大学、マラヤ大学、マレーシア国民大学）等もそれぞれ参加者を送った。

11月8日 : UTUSAN MALAYSIA
(掲載記事 別添③のとおり)

* 日本の力が保育園教育に関与する。

マレーシア社会における幼児教育の土台は弱い。この事実を全国のFELDAの入植地において11年もの間奉仕をしている日本の保母達が語った。彼女達は保育園に通うこの国の子供達が3M主義（読む、書く、数える）を押し付けられていると受けとめている。

そして、子供の創造力を芽生えさせる為に必要な“勉強しながら遊ぶ”という概念が実施されていないと語る。日本のボランティアメンバーの保母達42名がFELDAの入植地での活動を終了するのに伴い、最近KLのWISMA BELIAでセミナーを開いた。

彼女達はそれぞれ2年契約でFELDAの入植地において保育園の先生の指導を行っている。

駒沢彰夫青年海外協力隊代表は 協力隊メンバーの指導による 援助は目標を達成し、成功したと語った。またこの国の基礎教育は確かに発展したが、幼児期に遊びを重視していない幼児教育の特徴を強調した。

長嶋由美(29)埼玉出身はFELCRA Lekirで指導している保母達は忍耐力は強いが幼児教育を身近にする方法と知識が乏しい。

彼女達は読む、書く、数える、ことを強調し子供の遊びは指導していない。

保母達は自分の創造力にしたがって用意した遊具や教具を通して知識を遊びながら学ぶ教え方をしてほしいと語った。またFELDAの入植地で簡単に手に入るゴムの実、木、板、布等の材料で子供達の遊具を創ることもできると語った。

小林美幸(30)FELCRA Bukit Kepongもまた、FELDAの先生方は知識は少ないけれども 子供を教育する為完全なる教育方法で学ばせようとする事に傾いている。

なぜなら、地方の子供達の為には彼女らの知識を深め、もっとたくさんの訓練をする必要があると思われる為であると語った。

小須田芳枝(29)FELCRA Sungai TemauはFELDAの入植地の父兄は幼児教育への関心が薄い。なぜなら、彼らはその重要性を理解していないからである。

そのため、保母達は満足のいく活動を行うことができないでいる。彼女は先生達に、FELDAの入植地の幼児教育がより発展するよう その事柄(満足のいく活動ができない)の解決をはかる為に父兄に会うように、と呼びかけている。

(注) この記事は、セミナーを実施していたFELDAの幼稚園隊員に代わって、FELCRA配属の保母隊員に取材して書かれたものである。
従って、例えばFELDAとFELCRAの違い等内容的にも混同されてしまったものになっている。

Guru2 Jepun utamakan permainan dalam pendidikan Tadika

Cik Mitsuko Moriya, 28, seorang ahli JOCV (Japan Overseas Corporations Volunteers) sedang melayan seorang kanak - kanak bagaimana bermain dengan anak patung.

Beliau adalah seorang guru pendidikan kanak - kanak Jepun yang membimbing guru - guru pendidikan khas, Rumah Kanak - Kanak Cacat Sinar Harapan, Kuala Kubu Baharu Selangor.

Mitsuko adalah di antara 42 orang guru, anggota JOCV yang berada di Malaysia mengikut kontrak selama dua tahun perkhidmatan di FELDA dan FELCRA.

Bimbingan

Anak - anak patung itu merupakan salah satu alat bantu mainan yang dilaksanakan di Taska FELDA seluruh negara yang dibimbing oleh pekerja sukarela Jepun itu.

Perkhidmatan bimbingan mereka di FELDA tamat baru - baru ini seteah berada 11 tahun di rancangan itu tetapi perkhidmatan bimbingan Taska di FELCRA masih berjalan.

o Cik Mitsuko, 28, sedang melayan seorang kanak - kanak bermain anak patung di pamaran Pendidikan Kanak - Kanak JOCV, di Wisma Balia Kuala Lumpur baru-baru ini. — Foto oleh: Lim Ghee Haw.





BERBAPA orang peserta "Seminar Hari Pendidikan Kanak-Kanak" sedang mengambil nota - nota mengenai hasil kerja tangan yang disediakan oleh guru - guru (terdapat) sukarela Jepun di Wisma Bella, Jalan Syed Putra, Kuala Lumpur, baru - baru ini.

KURSUS BUKA RUANG GURU TADIKA BUAT RANCANGAN TERSUSUN

Oleh Wan Dayang

SEMINAR mengenai pendidikan kanak - kanak patut diadakan secara berperingkat - peringkat memandangkan ia merupakan suatu langkah berkesan untuk memperingkatkan mutu pengajaran guru - guru tadika.

Melalui seminar seperti yang dianjurkan oleh JOCV (Japan Overseas Cooperation Volunteer) atau kursus - kursus pendek lain, membuka ruang kepada guru - guru tadika untuk sama - sama beritotang dan berusaha menyediakan program pendidikan pra-sekolah dengan lebih tersusun.

Dasar temubual bersama beberapa orang peserta Seminar Hari Pendidikan Kanak - Kanak anjuran JOCV yang diadakan di Wisma Bella, Jalan Syed Putra, Kuala Lumpur, baru - baru ini, didapati guru - guru tadika memetikakan seminar pendidikan seumpama itu.

"Selaku suatu badan yang melaksanakan kerja - kerja sukarela di seluruh dunia sejak lama dahulu, JOCV memiliki banyak kenalan - kenalan yang patut kita iktiraf sebagai tenaga pengajar atau jurutah guru - guru tadika dari Institut Pembangunan Tanah BELDA, Sungkai Perak, Siti Lailah Abdul Karim.

Menurut Siti Lailah, pendekatan yang digunakan oleh JOCV iaitu "Bermain Sambil Belajar" memang sesuai bagi kanak - kanak di peringkat pra-sekolah.

Dengan itu kalanya, guru - guru tadika harus memulakan gerak dan mempelajari kaedah membuat krafangan seperti yang ditunjukkan oleh badan sukarela Jepun itu.

Tenaga pengajar atau jurutah guru - guru tadika sejak enam tahun lalu ini sentiasa memastikan setemal mungkin para pelahinya dibelajarkan dengan kaedah pembelajaran yang lebih sempurna termasuk menerusi seminar.

Seorang guru tadika dari BELDA Mata Ali, Padang Besar, Perlis, Nafisah Nayan, 21 tahun, berkata, beliau merasa sungguh beruntung kerana berpeluang menyertai seminar anjuran JOCV itu.

Mengenal konsep

"Sungguhpun terdapat sedikit kesulitan dari sudut konvensional, saya kaput dengan kesungguhan guru - guru sukarela dari Jepun ini menyediakan seminar yang begitu bermanfaat kepada kanak - kanak."

Bellau tertarik dengan konsep materialistik untuk kanak - kanak pra-sekolah yang ditandakan oleh badan sukarela Jepun.

Bellau berkata, konsep bermain sambil belajar matematik seperti yang ditunjukkan oleh JOCV menerusi film dokumenterinya mudah diterima oleh menarik perhatian kanak - kanak.

Kelak, katanya, ia merupakan kaedah paling mudah bagi kanak - kanak mengenali konsep dan hukum - hukum asas mata pelajaran matematik.

Seorang lagi guru tadika, Nur Faerah Samad, 27, berpandangan, guru - guru tadika patut menyertai seminar seumpama itu kerana mereka memerlukan pengetahuan lebih untuk membantu meningkatkan daya kreatif anak - anak didik masing - masing.

Katanya, untuk merendik kanak - kanak menjadi cerdas dan berdaya kreatif, guru - guru tadika harus rajin mencipta alat bantu mengajar supaya menarik minat anak - anak didik itu.

Bellau tertarik dengan konsep di mana guru harus "mektahirkan" diri dalam lingkungan dunia kanak - kanak kerana dengan itu mereka lebih mudah menyenangi dan mengatasi masalah yang dihadapi oleh kanak - kanak.

"Tidanya, guru - guru akan lebih mudah membantu kanak - kanak apabila menggunakan 'pelajaran' baru tanpa membebankan mereka," ujarnya.

Seminar Hari Pendidikan Kanak - Kanak yang bertemakan "Kanak - Kanak Mencipta sesuatu di mana badannya" itu dihadiri oleh 120 orang peserta terdiri daripada pegawai - pegawai dari jabatan Pendidikan, pegawai - pegawai dan guru - guru tadika dari FELDA, BUCRA dan KEMAS.

Tiga buah universiti tempatan iaitu Universiti Pertanian Malaysia, Universiti Malaya dan Universiti Kebangsaan Malaysia turut menghantar peserta masing - masing.

TENAGA JEPUN SERTA TASKA MAJUKAN PENDIDIKAN

Oleh
Zaharani Asran

TUMPUAN pendidikan awal di kalangan masyarakat Melayu adalah lemah. Hakikat ini dinyatakan oleh sekumpulan guru - guru Taman Asuhan Kanak-Kanak Jepun yang telah berkhidmat selama 11 tahun di rancangan-rancangan FELDA seluruh negara.

Meraka mendapati bahawa kanak-kanak di negara ini yang mengikuti TASKA terlalu ditekankan dengan konsep pembelajaran 3M iaitu membaca, menulis dan mengira. Meraka tidak ditrapkan dengan konsep bermain sambil belajar — satu keperluan untuk membangunkan daya kreatif kanak-kanak.

Guru-guru TASKA Jepun itu adalah antara 42 orang anggota sukarela dari negara Jepun yang menamatkan perkhidmatan mereka di rancangan-rancangan FELDA dengan mengadakan seminar sehari pendidikan kanak-kanak di Wisma Bofia, Kuala Lumpur, baru-baru ini.

Meraka membimbing guru-guru TASKA di rancangan-rancangan FELDA itu dengan mengikat kontrak perkhidmatan selama dua tahun tiap-tiap seorang.

Encik Akio Komazawa wakil Rancangan Kerjasama Sukarela Jepun Seberang Laut (JOCV) memberitahu bahawa bimbingan yang telah disumbangkan oleh anggota sukarela itu berjaya menepati sasarannya.

Katanya, asas pendidikan negara ini sudah maju cuma mereka memperkukuhkan ciri - ciri pendidikan kanak-kanak yang tidak dititikberatkan seperti konsep bermain kalangan kanak-kanak.

Cik Yumi Nagashima, 29, berasal dari Saitama, Tokyo, mendapati guru-guru TASKA yang dibimbingnya di FELCRA Lekir, Perak mempunyai tahap kesabaran yang tinggi tetapi mereka kurang pengetahuan mendalami kaedah pendidikan kanak-kanak.

Meraka terfikir menekankan agar kanak-kanak membaca, menulis dan mengira tetapi tidak mengasah mereka bermain.



YUMI NAGASHIMA,
Taska FELCRA Lekir, Perak.



YOSHIE KOSUDA,
29, Taska Sungai Temau, Pahang.



CIK MIYUKI KOBAYASHI,
30, mengajar di FELCRA Bukit Kepung,
Muar, Johor.

Guru-guru TASKA hendaklah mengajar kanak-kanak itu bermain sambil mereka mempelajari konsep ilmu melalui alat - alat bantu mainan yang mereka sediakan mengikut kreativiti sendiri; jolasnya.

Bahan-bahan buangan mudah didapati di sekitar rancangan-rancangan FELDA seperti buah - buah getah, kayu, beruti, papan, kain-kain perca dan sebagainya boleh

dijadikan alat-alat bantu mainan kanak-kanak, jolas Cik Nagashima lagi.

Cik Miyuki Kobayashi, 30, yang berkhidmat di FELCRA Bukit Kepung pula mendapati guru-guru di rancangan-rancangan FELDA cenderung untuk belajar kaedah pembelajaran yang sempurna untuk mendidik kanak - kanak walaupun mereka kurang pengetahuan di bidang itu.

Kerana kecenderungan itu

mereka patut menorima lebih banyak latihan untuk mendalami pengetahuan mereka untuk kepentingan kanak-kanak di kawasan luar bandar, ujarnya.

Cik Yoshie Kosuda, 29, telah berkhidmat di FELCRA Sungai Temau, Pahang mendapati ibu bapa di rancangan-rancangan FELDA kurang memberi perhatian kepada pendidikan kanak - kanak kerana mereka tidak

memahami kepentingannya.

Oleh itu, guru-guru TASKA tidak dapat menjalankan aktiviti-aktiviti mereka dengan memuaskan.

Boliau telah menyarankan kepada guru-guru tersebut agar membuat perjumpaan dengan ibu bapa untuk mengatasi perkara itu dan membawa faedah kepada pendidikan kanak - kanak di rancangan-rancangan FELDA.



ENCIK AKIO KOMAZAWA,
wakil Rancangan Kerjasama Sukarela Jepun
Seberang Laut (JOCV).

事務所コメント

① 意義

就学前の幼児教育については、近年マレーシアでも何かと注目され、人々の関心を呼んでいる。

又、その重要性について、新聞等で論じられる機会も多い。

しかしながら、JOCV隊員が一貫して指摘していることは、教育重点主義（文字・算数）に走り過ぎるきらいがあることであった。

こうした状況の中にあつて、本セミナーは、幼児教育に直接携わっている人々を対象にしたもので、彼ら関係者に一石を投じた形となった。

開催時期についても、実に時宜を得た意義深いものとなった。

② 主催

当初から、JOCV/FELDA共催を目指したが、経費の負担、実施運営能力・人材ともFELDAには力が無く、JOCV主催とならざるを得なかった。

③ 効果

先ず、何より、前田技術専門委員の御協力・御指導と出張派遣を実施してくれた事務局に感謝を申し上げます。同委員の来マは、セミナーが成功した第一の理由である。

以下、効果としては次の点が挙げられる。

FELDAの協力、隊員の努力（ポスター・案内状等のPRがうまくいった）によって、

- ・ 参加者が予定の100名をはるかに上回り、161名にも昇った。
- ・ 参加者は極めて熱心で、メモを取る人も多く、質疑応答も時間超過で打ち切らざるを得なかった程である。
- ・ 参加者の反応は当初の予想をはるかに超えるもので、いかに人々が関心をもっているかを示した。又、同様イベントの開催を望む声も強かった。
- ・ 当方の狙いであったマレー語紙（UTUSAN MALAYSIA）の取材が三回にわたって報道された。内容もJOCVの目指す「遊びながら学ぶことの重要性」について概ね良く触れている。

又、同紙は教育省との共催で今後、幼児教育に係るワークショップを全国で開くことを企画している由で、JOCVの協力を求めている。

- ・ 過去派遣されたFELDA隊員のカウンターパートや、各隊員赴任地の幼稚園教諭も多く参加し、技術のブラッシュアップ効果があった。

④ 総括

FELDAを代表して最後に挨拶した訓練課長（ニック・ザイナブ女史）が、10年余のJOCV隊員の活動に触れ、感涙にむせたこと。

教育省カリキュラム局幼児教育担当者（ハジャ・ナエマ女史）が、42名のJOCV隊員による長年の協力を深い謝意を述べた事が、印象的であった。

ひとつの機関に長年にわたって協力活動を展開した分野につき、こうした形でイベントを開催し、区切りつけるのも、まとめの一方法であり、他の参考となろう。

成功に導いた裏には、金城シニア隊員の力が大いにあることをつけ加えたい。

以上

評価・効果

準備段階より100名程度の出席を得ることを望んでいたが、それを上回る161名の出席者があった。又、4時間にわたるプログラムも終始熱気に包まれ、熱心にメモを取る人々、全ての質問に応ずることのできないほど活発な質疑応答の時間と、予想以上によいセミナーとする事ができた。

この背景には、社会生活が豊かになりつつあるマレーシアの、さらに知的な物への欲求の現れがあると思われる。

また、映像を使つての講演という形は、言葉を駆使して行う講演より、より具体的に理解しやすく、人々に強いインパクトを与えることができたと思う。

当日実施したアンケートからも、出席者のセミナーに対する感想はおおむね良しとされており、次回の開催への要望もあった。

ただ、隊員の語学力の問題上、これ以上の会となると限界という思いもある。事実、質疑応答の内容を訳（マレー語→日本語）するのに時間がかかり、深くまで掘さげることができなかったし、その結果アンケートにも質疑応答の時の不満が28%にもなって表れた。

期待する効果としてあげた、幼児教育の重要性と理解を深めることは十分にできたと思われるが、その中で、幼稚園教諭養成機関設立の必要性を訴えるところまでには至らなかった。

しかし、子供の成長過程にあった教育の必要性を多くの出席者（教育省の役人・大学教授・幼稚園教諭・一般の人々）に伝えることができたことは、何にもかえがたい喜びであつたし、3度にわたる新聞報道によつても私達の意図が伝えられており、今後に与える目に見えない効果にも期待している。

今回のセミナーを通じて、新たに親しくなれた幼児教育者もあり、今後の活動の上にも良い出会いの機会となった。

最後に、11年にもおよぶ協力活動の中で一つのまとめとしてセミナーを開催したわけであるが、以前、JOCVが入って指導した任地の方々やカウンターパートが多く出席してくださりJOCVの蒔いた種が、今も現地の方々の中に生き続けていることをこのセミナーを通して知ることができ、何よりもの大きな成果であつたと感じている。

幼児教育／幼稚園への興味・関心の促進

はじめに

マレーシア全体として幼児教育（教育）への関心が高揚しているのを感じる昨今、私達はより具体的に身近な人々の幼児教育／幼稚園への意識を知りたいと考えるようになった。

その手段として記入方式のアンケートを実施。FELDA入植地（3地域）と、クアラルンプールの私立幼稚園（1ヶ所）の協力を得られ、集計を通して様々な意見に触れる事ができたのである。

複合民族国家であるマレーシアではごく日常的なことであろうが、人種・民族を越え、人間として共通の場に立つ事、「人」を大切に作る心等を改めて教えられた。

宗教が生活・人格形成等に深くかかわっている事も特色であろう。

少数意見であったが、幼児期の体づくり（栄養のバランス・体操）・園外活動（実践的なものを含む）の大切さ・安全教育・伝統文化とのかかわり・学校教育の基礎としての幼稚園の役割と小学校へのつながりへも、関心がよせられたのは嬉しい事であった。

今回の結果を、そのまま現在マレーシアの人々がもつ意識とするには不十分であるかもしれない。しかしこれをふまえた上で傾向を探りだし、又一步マレーシアの幼児教育を向上させる資料となるよう願うものである。

1. アンケートの内容・意図・結果及び考察

① 基本情報

内容：入植地名

アンケート配布数と回収率

記入者の性別・年齢

意図：地域性

保護者の子供の教育への関心度合と

主導権及び年齢層

を知る。

結果：全体として総配布の62%にあたる2690部（人）の回収があった。コメント欄には約70%の記入。

回収率は最大30%の地域差が見られた。

記入者は、男性が女性の倍近く、ごく少数だが両親で話し合つての回答もあった。

考察：高率の回収を得られたのは、各地域のASDO、SSD、SDAの積極的な協力があつたからこそである。コメント欄への記入が多い事からも保護者の関心の高さが窺える。

Sabah州Sahabat地域の回収率が悪かつたのは、時間的な問題もあつた為であろう。

クアラルンプールの私立幼稚園では、女性による記入が多く、入植地内と比較して、より積極的と言えるだろう。

② 子供に関して

内容： おおよその兄弟（姉妹）の存在と、幼稚園児の位置

意図： 上記による違いを知る

結果： 不明確な回答が多かった。

考察： 質問の意図を伝えられず、この項目は参考にできないと思われる。

③ 子供に望むもの／思い描く幼稚園の姿

内容： 保護者が抱く子供・幼稚園の理想像

意図： どこに子育ての重点を置いているか、どこに重点をおいた教育を望んでいるかを知る。

結果： 「明朗快活で勉強のできる子」がどの地域でも第一にあげられ「3M（読・書・算）の習得」を望む声が強い。

続いて「両親に従う；年長者・先生への尊敬；秩序や規律を守る礼儀正しさ」が求められていた。これらを通し、「自分に自信を持ち、社会に有益な人となる」姿を思い描いている。

幼稚園に対しては、

- ・ 遊びと勉強のつり合いがとれている。
- ・ 環境が整っている（安全・清潔等）
- ・ 良い幼稚園教諭がいる。

ことが条件として挙っていた。

考察： 3Mの習得は、欠く事のできない要素となっているが、人々の意識は、これのみに偏っているわけではない。

「心・知」の両方が大切である事、又「社会性」へも目を向けている。

「体（健康）」に関して意見が少ないのは、あまりに基本的な事柄と考えられているからだろうか？

幼稚園にさまざまな要素が必要である事も、すでに多くの人が気付いている。

④ 幼稚園の必要性とその理由

内容： 幼稚園を必要と感じているか、又その存在理由

意図：教育機関としての幼稚園を、認識しているか、積極的にとらえているかを探る。

結果：ほぼ全員が必要を感じ（98%）、通園を望んでいる（93%）

その理由は、

- ・ 学習の為
- ・ 秩序・規則を習得する
- ・ 種々の事柄を経験する
- ・ 友人を得る

と続く。

子供をあずかってもらう、あるいは皆が通うからという消極的な意見は少数である。

考察：幼稚園は、小学校の準備段階と考えられているようだ。

「学問の基礎を得る」という点では、実質的な知識を望む多くの声に混って、「学習に興味を抱く気持ち」を育てるとか、「すすんで勉強する態度」を身につけるといった意見もみられた。

これは、子供自身の意欲に働きかけるということで、大変重要なポイントになると感じた。

⑤ 子供にとって幼稚園とは

内容：子供が通園する状況について

意図：子供は、幼稚園を楽しんでいるか？どのような時に通園を躊躇するかを通し、保護者と教師の働きかけを知る。

結果：喜んで通う子供がほとんどである。（91%）

通園を躊躇するのは、

- ・ 学校休み明け
- ・ 入園当初の不慣れな時期

で、これへの対応は、幼稚園への報告・相談となっている。

考察：通園を嫌がる子供に対し、気分が変わるように働きかけたり幼稚園の意味を伝えようとする努力がなされている。これからも、保護者が通園に積極的である事がわかる。

子供がどのような状態（気持ち）で通園してくるかは、最も基本的で大切な事である。教師側が事前に配慮していける点であり、もつと気を配るべき事柄だと考える。

⑥ 幼稚園への関心

内容：保護者は、幼稚園に関心を寄せているか。
興味の対象、情報入手方法、情報の内容

意図：保護者の認識は、どのようなものか、又望んでいるものを知り、働きかけの手がかりをつかむ。

結果：多くの人に関心を持っている。(91%)

認識されている幼稚園での教育とは、

- ・ 3M (読み・書き・算)
- ・ 秩序・規律の習得
- ・ 集団生活の経験・・・と続く。

情報を得る手段は、

- ・ 子供の話から
- ・ 幼稚園のお知らせ
- ・ 教師に尋ねる・・・となる。

関心を寄せている内容は、学習の内容を始め、諸々の活動について。

考察：認識している幼稚園の内容は、前述の「子供に望むもの」、「幼稚園の必要理由」と一致している。

人々の確固たる意識を示しているのではないだろうか。

情報を得る手段の第一に「子供の話しから」があがっているのは、不確実なものを感じるし、教師の働きかけの不足を示しているといえる。保護者も関心が高い割に積極的な働きかけが、みられず、教師・保護者共課題となる点であろう。

⑦ 幼稚園への協力体勢

内容：幼稚園の活動に参加したいと思っているか、又積極的に参加するかを知る。

意図：意識と実際行動の差を調べる。

結果：幼稚園の活動に参加したいと思う気持ち(89%)と、積極的に参加するとの回答(81%)に多少のひらきがみられる。

参加が思うようにならない理由は「時間がない」。

考察：幼稚園からは、共同作業への協力が得られにくいという問題がよく出されるが、アンケート結果だけみると協力姿勢があるように見える。

協力を得られない理由は、本当に時間の問題だけであろうか？

少数ではあるが、教師の領域だからと考える人もあったように思えた。

⑧ 教師への認識と希望

内容：教師の仕事をどう考えているか、保護者が持つ教師像と期待するもの。

意図：幼稚園（保育）の中に占める教師の役割をつかむ。
保護者と教師の関係を深めるきっかけを授す。

結果：教師の仕事は容易でないと考え、それ故専門の知識を強く望んでいる。指導力や保育技術が優れていると同時に常に子供へ気を配り、気持ちを察する事のできる精神面が協調されていた。基本的な事である「子供が好き」をあげる人も多い。
要望は、子供・保護者ともっと十分なコミュニケーションをとり子供の様子を知らせてほしいとなっている。

考察：理想の子供・幼稚園を思い描く時、教師の影響が大きいと感じているのだろう。
その希望がうわべの技術にとどまらず、精神面に及んでいるのは素晴らしい事だといえる。子供・保護者とのコミュニケーションを望む声は是非、利用したいものである。

2. 幼稚園（教師）に求められている事

教師は専門的な立場から子供たちとかかわるうちに、家庭（保護者）の理解・協力が必要な事を知った。保護者は、子供のよりよい成長を望む中から幼稚園の存在を認め、その発展には様々な要素が不可欠である事に気付き始めている。このような状態の中、教師は、これから「幼稚園の活動にどのようにして保護者を引き込んでいくか」を真剣に考える時期であると痛感する。

3. 取り組みの具体例と予想される効果

JOCV幼稚園教諭隊員が今まで取り組んできたものを含め、いくつかの例を挙げながら考えてみる。

① 幼稚園からお知らせ（プリント）配布／掲示版の利用

注意事項・お願い等伝達する他、子供の様子や特別カリキュラムといった幼稚園の出来事を保護者に伝えることができる。緊急連絡にも使用可。

定期的なものと、行事前等特別なものに分けて利用するとより効果的といえる。

② 連絡帳の利用

教師と保護者の間を行き来し、お互いの情報交換に役立つ。内容は、健康状態、子供が興味を持った活動等を知らせる他相談や質問のやりとりがあってもよいと思う。

③ 家庭訪問

教師がこどもの家庭での状態を知ることができ、これによつて多方面から子供にかかわることができるようになる。

保護者は、自身の家庭でありリラックスして話せるのではないかな？

④ 保育参観

幼稚園での状態を知ることができる。子供が学んでいる内容だけでなく、指導法・子供の反応を直接感じる機会となる。

- ⑤ 行事への参加
入園式・運動会・作品展等親子で一緒に経験できる場面を通し、幼稚園の活動に関心をよせる機会とする。
- ⑥ 幼稚園舎の開放
園児以外の子供・大人へも幼稚園の存在をアピールすることにより、「皆の幼稚園」という気持ちを育てる。
- ⑦ クラス懇談会／個人面談
園運営、設備等諸々の問題を保護者、教師、その他の関係者とが話し合い、それぞれの立場から働きかけを確認しあう。面談は、より個人的な点へも話が及ぶであろう。
これらは適宜実施されるべきである。
- ⑧ 勉強会（講演等）
共に子育てについて学び合う機会とする。

4. 今後の方向性

前述の取り組みは、まだまだ試行錯誤（1部構想のみ）の段階であり、教師や人々の間に浸透しているわけではない。

これらを手がかりとしてより効果的な方法へ改善される事を願って、ここに記したものである。

教師は、積極的に保護者に働きかけ、子育ての両輪ともいえる「幼稚園」と「家庭」の繋がりを、より強める努力をしてほしい。

一方で幼児教育とは、「遊びと学習が切り離されたものでなく」、これらは「常に同時に存在する」と考えられている。故に「遊びを通して心・体を成長・発達させ、知識を得る」という方法で行われるべきである事をいつも心に留めておくことを切望するのである。

活動評価

草の根の幼稚園教育を育てた青年海外協力隊
「 “継続は力なり” マレーシアにおける11年間の活動 」

前田 美知子

1. 発展途上国の幼児教育と青年海外協力隊

今、世界中の国々がそれぞれ幼児教育をすすめるようとしている。幼児は、その国の将来を支えていく大切な存在である。したがって、幼児の教育は、その国の将来を築き上げる大きな柱をつくる仕事である。先進国には、幼児教育の長い歴史を持ち非常に進んでいる国がある。一方、開発途上国では、国が充実してくると幼児教育に注目をしはじめる。

そして、幼児教育の一步を踏み出した国もあれば、これからという国もある。また教育よりも、飢え・貧困・病気からの救済を急がなければならない国もある。しかし、どの国も幼児によりよい教育をすすめたいと願って努力していることに変わりはない。

日本は幼児教育については、長いこと先進国の欧米から学び、吸収し、変遷を重ねながら日本の幼児教育を創り出してきた。現在でも外国の幼児教育を研究したり、見学したりして受容的に学ぶことが多い。

しかし一方、日本に対して幼児教育への国際協力を求めてくる開発途上国があることはあまり知られていない。特に草の根レベルの幼児教育については、無関心な人が多い。日本の幼児教育関係者は、欧米の幼児教育から学ぶだけでなく、開発途上国の幼児教育にも目を向けてもよいのではないだろうか。

今、幼児教育の歩みを始めようとしている開発途上国を理解し、できることから協力することによって、自ら学ぶ姿勢が必要である。

今、開発途上国からの要請に応え青年海外協力隊の幼稚園教諭隊員が、9ヶ国で84名活躍してきている。そのうちの約半数の42名がマレーシアの草の根のレベルの幼稚園教育の自立に協力してきた。

次項の表は、各国への派遣の実績である。

幼児教育は、平和を築く仕事でもある。幼稚園・保育所をつくり、幼児を育て、教師の人づくりをする。それは発展途上国の国づくりへの協力でもある。青年海外協力隊に参加し幼稚園教諭、保母の経験・技術・知恵をいかすことは、国際親善の役割を果たすと共に自分を鍛え、自分を育てる勉強の好機会でもある。今、さらに青年海外協力隊に発展途上国から幼児教育への要請増加が待たれる。

また国際協力をめざして、経験豊かな幼稚園教諭、保母が協力隊に応募されることを期待する。

青年海外協力隊 幼児教育 隊員派遣実績調査

(平成3年10月現在)

		幼稚園教諭隊員			保母隊員			合計派遣数
		派遣年度	現在数	累計	派遣年数	現在数	累計	
	インド				S42~45	0	2	2
ア	マレーシア	S 55~	2. 9=71	42	S 59~	4	10	52
ジ	スリランカ	S 58~	2. 内男1	11				11
ア	モルジブ				H1~H2	0	2	2
	中国	H 4~						
ア	ガーナ	H 1~	1	1	S 63~	2	2	3
フ								
リ	ニジェール	H 3~	2	2				2
カ								
南	ホンジュラス	S 55~	1	5. 内男1	S 59~	1	3	8
米	ボリビア	H 2~	1	1	H 2~	3	3	4
太								
平	ヴァヌアツ	H 3~	1	1				1
洋								
合計	9ヶ国		11	62		10	22	84(2)
備考	平成3年全派遣隊員累計 13,000名中 0.7%が幼児教育に派遣されている。							

(調査：技術専門委員)

2. “継続は力なり” 11年間の継続派遣の生み出したもの

(1) マレーシア派遣のきっかけ

多くの開発途上国の中で、最も早く、草の根レベルの幼児教育の為に幼稚園の必要に着目したのは、マレーシア連邦土地開発公団FELDAだった。FELDAは、全国の山間地に入植地（村）を開発し、村ごとにイスラム寺院、小学校、幼稚園を必ず設置したが、子だくさんの入植者の為に、民家や倉庫を利用した幼稚園で、「先生」として取り合えず入植者の婦人達（中高卒）が採用された。どの園にも園長はなく、FELDAのASDO、SDAが管理者にあてられた。

1970年～10年間、西ドイツのボランティアがいたが、援助の打ち切りと共に引き上げた。当時、幼稚園教育の専門家、指導者がいないので、何をどうしてよいかわからない。マレーシアには、都市に少数の幼稚園がある程度で国全体の幼児教育もまだこれからという実情だった。

1975年、大の親日家であったFELDA長官アラジン氏が来日し、日本の幼稚園を参観された。この時、日本の幼児の意欲的な姿、幼稚園の教師の愛情の深さ、すぐれた指導力、勤勉さなどに感銘を受けられたことが、青年海外協力隊に幼稚園教諭の派遣を要請するきっかけとなった……ということである。

(2) 11年間の継続派遣の効果

当初はFELDAの幼稚園事業についても、幼稚園教諭隊員派遣の将来についても、明確な見通しは見えなかった。しかし、FELDAは全国に組織を持つ公共事業団であり、幼稚園が次々と公設される、マレーシア人入植者の子供を対象とする事業である。このことから、発展性ある事業であり、また是非とも成功させなければならないプロジェクトであるとの認識はあった。また、日本からマレーシアへの経済援助、技術援助が年を追って増加していく時期でもあった。

昭和55年（1980）FELDAの幼稚園に幼稚園教諭の派遣が開始され、以降平成3年秋までの11年間に42名（シニア1名を含む）の隊員が、マレーシアで活動を展開してきた。

11年を経た現在、FELDAの幼稚園教育事業は立派に自立し、草の根レベルの幼児教育は現地の人々によって運営されている。この幼稚園教育の土台は、協力隊とマレーシア人の協力・協調によって育て築き上げたものである。11年間には、協力関係が常にスムーズだった時ばかりではない。しかし、お互いの努力によって乗り越えすばらしい成果に達することができた。まさに継続は力なり、いや継続させることが力となったのである。

以下、隊員の活動、FELDAの特性と協力関係、隊員の目標としてきた「遊びの中で学べる—幼児の発達に即した指導」等について、幼児教育の技術顧問、隊員の相談役を努めてきた立場から、11年間継続派遣の経過をたどって考察を述べることにする。

3. 幼稚園教育の土台を築き上げた隊員達の活動の展開

(1) 初期の隊員達 - 一人一人が体験を積み重ねて -

昭和55年(1980)最初の隊員3名が、その後3~4名ずつ、マレーシア各地の入植地幼稚園に派遣された。当初は、全く白紙の状態。民家の改造、遊具、机、棚、手洗い、便所作りからの活動開始。現地の教師達は、幼稚園初体験。日本人の協力隊が幼稚園をやってくれるものと傍観している。隊員は、自分が子供と遊び指導する姿を見せながら、指導方や教材作りを伝える。隊員が汗を流して遊びを指導していると教師達はのんびりと見物し雑談を楽しんでいる。ゆったりとした時のながれの中で隊員は、幼児達の指導・教師達の指導・教材作り・大工・ペンキ屋・左官屋・保健指導...何でも屋の大奮闘。全く受身でいる教師の中で、自分一人でキリキリ舞いをしないように、言葉や習慣の壁を乗り越えながら、幼稚園に関心をもたせ、やる気をゆさぶる。これが最も大きい課題であった。

現地側の幼稚園運営指導・教師の管理指導は、入植地事務所のASDOが隊員のカウンターパートとなる。幼稚園教育のアドバイザーとして幼児からの発想で幼稚園づくりに努める隊員と、管理監督面から幼稚園を視る管理者。本来、双方が協力すべき関係だが当初は摩擦も少なくなかった。当時の隊員報告は語る。

「幼稚園は、文字・数を教えるところと考えられ、ノートにABC・アラビア文字・計算等を書くことに限られている。狭い部屋に、年齢の区別もなく40人~50人を入れ、子供の理解とは無関係に授業型の教育が行われている。それ以外の時は、幼児は放任される。現在までの条件内で少しでも幼児に合った指導を探したい。

この国の文字・計算への必要度は解る。カードや具体的な教材・遊具を手づくりし、遊びの形を通して子供に学ばせ、教師にも伝えたい。と同時にもつと幼児らしい遊びをさせたい。」

「幼児達と心が通う。教師達も時間をかければ少しずつの進歩がある。しかし、管理者に積み上げた指導に介入されて悩むことが多い。ことば遊び・数遊びの手づくり遊具を、箱にしまいこんで使わせない。ノートを使わないと教育だと思わない。幼児のことばや遊びを集めて劇をつくり、お面をかぶって遊んでいたら、中止させられた。イスラムの教えでは偶像は認めないのだ。それに気付かなかった自分。いきなり介入する管理者。残念！」

「幼児、先生達を前にしての衝突。でも、私の日頃の保育を知っている先生達が、かえって私のやり方を支持し、幼児との接し方、指導の仕方をまねてくれるように変わってきた。ASDOも、衝突後は次第に協力的になってきた。雨降って地固まるの思い。自分の技術や信念をストレートに示すのではなく相手側を尊重して示すコツを覚えていった。」

初期の隊員達は苦勞を重ねながら、活動経験を基に1982年「PELDA幼稚園指導要領」を作成。それを境として活動の場を一入植地から、周辺の入植地に拡大し、講習会を開いたり、近隣の入植地幼稚園に出張指導等を始めた。

継続派遣の効果が発揮され始めたのである。

(2) 協力して学びながら活動を進める — 多人数による組織的パワー —

FELDAは構造的にも大きく、中央と入植地の通信状況が必ずしも円滑でない。本部の幼児教育への考えも、入植地に正確に伝わるのが困難で、それ故に隊員も現場で辛酸をなめたが、評価が高まるにつれてFELDA本部でも隊員の活用を積極的に考え、また、現場に対しても適切な指示を出すなど、幼稚園教育への期待や取り組みの姿勢を示し始めた。本部、入植地、隊員の連絡・連携による幼児教育への協力態勢も一朝一夕にはいかないが、少しずつ前進し、隊員もこれに応じて意欲を高めていった。

この頃から、マレーシアも国力の発展、FELDAの発展に伴って幼稚園も増設が続き、隊員数も増え、昭和60年には最大21名となる。各隊員の任期は2年ではあるが、先輩から後輩へのリレー、隊員の横の連携など、多人数のパワーを発揮して価値ある資料を生み出した。

S59 「マレーシア幼児教育の考え方と現状」 初の貴重な実態調査

S59 「就学前教育カリキュラム」(教育省発行) 翻訳 全隊員で分担作業

S60 「新幼児教育参考資料集」 作成 FELDA本部と全隊員の協力による。

隊員は組織的な取り組みによって、幼稚園教育を充実させようと熱意を燃やした。

就学前カリキュラムの翻訳は、マレーシアの国としての幼児教育の基本理念を知って、隊員の活動をそれから遊離させないようにしようとしたのである。就学前カリキュラムには、マレーシアの宗教・道徳に対する考え、知的教育の重視がうたわれているが、同時に幼児期の発達と遊びの重要性ももりこまれて、隊員の「遊びを通して学ぶ・幼児の発達に即した指導」という目標とは基本的には合致することを確認した。

むしろ、マレーシア社会一般の幼児教育に対する認識や教育界一般の傾向が“幼稚園イコール小学校ミニ版”の傾向に向いつつあった。そこで隊員はFELDAの指導部門と協議しながら、遊びを通して学ぶ為の具体的な活動事例として、新幼児教育参考資料集を作成した。この資料集をテキストとして、FELDAの中央訓練所や、入植地での講習・研修会に活用した。幼児期には、遊びを通して子供は学ぶ…教師は詰め込み指導によらず、幼児の興味を引出しながら指導することが必要である。この考え方と指導法は、入植地幼稚園の現場には、少しずつひろがっていった。何と云っても、幼児がいきいきと遊び、遊びを通して知的に成長していく姿が、現場の教師、そしてASDO、SDAにも理解されていったのである。

隊員の指導・援助する幼稚園は、着実に向上していった。また、その影響は、周辺の幼稚園にもひろがりはじめ、少しずつではあるが幼児教育の水準が上がってきたのである。

継続派遣は活動を組織化し、総合された効果を生み出し始めた。しかし、エピソードも多い。仕事を巡って喧々ごうごう、マレーシアを思えばこそその大論争が起こる。隊員報告書は語る。

「これ程の大部隊になるのなら、派遣前に活動方針を示し指導すべきではないか。JOCV本部や技術顧問は何をしているのか」隊員の情熱の方が先行していたのである。しかし、この葛藤もその後のマレーシア幼児教育の糧となったのである。 多謝!

(3) 教師の指導力向上と自立への協力 — 少人数派遣のチームを固めて —

昭和60年を過ぎるころから、300余のFELDA幼稚園の施設・設備・遊具などが、質量ともに向上してきた。つまり、目に見える教育条件については隊員のしてきた仕事が広範囲に広がったことを示している。現場の教師の工夫による手づくりの遊具も増え、砂場、運動遊具など戸外遊びの環境整備も、マレーシアの人々の努力ですすみ出した。

この頃、FELDA幼稚園事業の自力運営への意向が動いた時期もあつたが、協力隊現地事務所、FELDA本部、隊員、技術顧問が協議の結果、FELDA側の再認識もあつて、小数の隊員の派遣を継続することに決めた。継続の課題を、教師の指導力向上と、それまで隊員の派遣のなかつた奥地での活動にしぼる。隊員は、それぞれの任地に遠く離れても協力態勢を固め、いままでの継続派遣の蓄積をフルにいかして広範囲に活動をすすめた。

マレーシアには、幼稚園教諭養成機関がまだない。昭和58年からFELDAの中央訓練所では現地人講師と隊員が協力して、教師の研修事業をすすめてきた。現地教師は、入植地の中高卒の奥さん、娘さんなどで、就職後研修(3ヶ月宿泊研修)を受ける。教育理論と実技研修を受講して幼稚園の先生になる。また、中央訓練所の講師が日本に派遣され、長期研修を受けた彼女も、隊員と同様日本では苦勞したが、帰国後は中央訓練所に復歸して活躍している。

幼稚園教師の指導力を高めるには、公開保育を行つて、教師同志が話し合い刺激し合うことが必要である。互いに問題意識を持って勉強し合うこと、幼児に合わせて教えることの必要性を感じることなしには向上は望めない。隊員のいる地方では公開保育が行われている。隊員が引き上げた後も、引続き自分達で勉強していけるように工夫をしている。

以前は、受身であつたマレーシアの人々は腰を上げ、自分達で幼児教育を進めだした。協力隊の派遣が開始されて11年、草の根の幼児教育はマレーシア人自身の手で自立し、成長を始めたのである。11年間、42名の継続派遣の結果、FELDAの幼稚園関係の人々との協力・協同によつて、マレーシアの幼児教育の中で、草の根レベルのしっかりした土台を築き上げたのである。この土台の上にマレーシアの人々自身の幼児教育が建設されることと思う。

4. 協力隊と技術顧問の相互関係

私は、昭和55年マレーシア初の派遣のときから技術顧問に委託されたが、隊員報告書で状況把握をするのみ、その頃の隊員には援助・助言の機会を作れず、苦勞された方々には申し訳なく思っている。昭和62年、平成2年に現地巡回指導の機会をいただいた。自分の目で幼稚園を見学し、幼児や先生達に触れると、それまでの隊員達の努力がピンピンと伝わってきたのである。それからというもの、私は技術顧問というカチットしたカラを次第に脱ぎだして、自ら隊員の相談役、兼助っ人をもつて任じるようになつていった。

マレーシアの隊員達も、私をフルに活用してくれたのである。技術顧問という役職が、本当に現地の実態を把握して適切な助言・助力の役割を果たすように機能する為には、私の場合隊員達からじかに生の声、切実な願い、現地の情報をぶつけられたことが要因となった。ただその声を無批判に受け止めてしまうのではなく、協力隊の本部の計画・意見と照合し、判断を加えながら助言し、実践的に支援していくのである。そのことを通して、現地の活動がよりよく展開すること、隊員がより成長することを願っているわけである。

マレーシア10年間の幼稚園事業のしめくくりとしての「幼児教育セミナー」は、隊員と東京にいる私との間で連絡を重ね、双方で準備をすすめ本番を現地でぶつけた。この「幼児教育セミナー」は、マレーシアの国全体としても最初の大がかりな幼児教育研究会であり、PELDA関係だけでなく教育省や国立大付属幼稚園などの幼児教育専門家・識者達にも大きな感銘を呼び起したのだった。

隊員も私も共に喜びとするところは、隊員が一貫して目標としてきた「遊びを通して学ぶことの重要性－幼児にあった指導法」を映画によって訴えることができたこと、そして、隊員の活動をデモンストレーションで紹介することができたことである。そして私が驚いたのは、この会は着想から実施まで1年間、少数の隊員で支え合い励まし合って漕ぎつけたチームワークのよさ、加えて、10年間の先輩隊員の積み上げをいかそうとした熱心さであった。またこの企画は、隊員が日本にいた場合でも企画した経験のないような規模の大きい、密度の高いものである。保母・養護・視聴覚隊員の協力と、現地事務局の後援のすばらしさ、そしてすべてを取りまとめた金城睦子シニア隊員の実力に拍手し、私を巻き込んでくれた隊員の熱意に感謝している。

文京区教育センター
幼児教育研究部講師

青年海外協力隊
幼稚園教諭技術専門委員

1980年から1991年に渡る
FELDAにおける青年海外協力隊の活動報告

序章

1975年より、FELDAの入植地においてJOCVの活動が始まる。

まず最初に野菜・家政の分野が活動を開始し、続いて幼稚園教諭・手工芸・保健婦等の職種へと拡がっていった。

宗教・生活習慣・思想等の違いによって初期のJOCV活動は、多くの問題を抱え込まざるを得なかった。

1. 新隊員に対するFELDA側の配慮

FELDAの入植地での生活は、強いカルチャーショックを引き起こすことが容易に予想される為、FELDAはオリエンテーションプログラムとして新しく入る隊員に対して6ヶ月の観察期間を用意した。

この観察期間中に、隊員はマレー語の習得に務め、自分の職種及び入植地での生活様式を観察しながら現地の生活に適應していくのである。その後始めて、観察期間中に感じた問題点等をもとに一年間の活動プログラムをたてることを求められるのである。

2. JOCVと開発部の間に生じた評価システムの違い

a) これはFELDA開発部とJOCVの間で生じたもつとも大きな問題であった。

先進国の中で育った彼らは、日本の一般的な常識をFELDAのプロジェクト（幼稚園・手芸・野菜のように）の状態と比較すればあまりにもレベルの高い意識・知識を持っていた。

その為、2年という期間に入植地の持つ能力ということを考えずに日本式に事を進めようとした場合苦勞せざるをえなかった。

b) FELDA開発部とJOCVの考え方の違い

JOCVの目から見ると入植者は子供の教育についてあまり重きをおいておらず、その為幼稚園についての関心が少ないように感じていた。

確かにそういう面はいなめないが、入植者の収入が不安定でしかも少ない状況で基本的な事柄（衣・食・住）に追われ、小学校の子供の教育に対する関心が幼稚園より重きを置かれていたとしてもしかたのないことであった。

又、JOCVとFELDAの間でカリキュラムに関することで大きな考え方の違いがあった。

教育省が就学前教育の目標を示す以前に、FELDAでは幼稚園の保育のあり方として「セミフォーマル（小学校に準ずる）」ことを望んでいた。なぜなら、3歳より保育園に入り4歳で幼稚園そして6歳で小学校へ入る日本の子供と違って、マレーシアの子供は5、6歳になってはじめて幼稚園に入る為であった。

この為、開発部特に訓練部（幼稚園教諭の研修をつかさどる）の職員はJOCVの考え方（情操教育）を受け入れることができず、自分達のやり方で通そうとした。

しかし、この問題は、教育省が1985-6年に就学前教育指導要領を示したことによって解決を見ることになった。

c) 仕事に対する責任感をめぐっての問題

JOCVと半数近くのFELDAの職員及び幼稚園教諭との間でおこったもめ事は、JOCVの仕事に対する責任感の強さが起因となった。

幼稚園教諭はJOCVのように幼児教育部門の仕事だけであるが、仕事の完遂に欠けるきらいがあった。(仕事後家庭の主婦としての勤めがある為)
計画されたことがよく遅れる為、しばしばJOCVを失望させいらだたせる結果を招いたのであった。

3.

a) 社会開発事業に対するFELDAの経営面からの見解

FELDAにおいて社会開発事業を担当する職員は、特有の問題を抱えていた。というのはどのFELDAの経営部も社会開発事業をあまり必要としておらず、農場管理のように重要性はないと見なしていた為であった。又開発部の職員は、次のごとくJOCVのように一つの部門にのみ責任を負うのではなく、いくつもの部門の責任を持っているのである。

FELDAのASDO/SDAの業務

1. 婦人活動の指導
2. 地域の環境美化
3. 健康で明るい家庭作りの指導
4. 普及活動
5. 幼稚園

JOCVの業務

- 幼稚園教諭隊員は幼稚園だけ
手工芸隊員は手工芸だけ
野菜隊員は野菜だけ

上記の表より、なぜJOCVが2年間の活動中に問題に直面するのか理解していただけるであろう。入植地のマネージャーや全ての開発部の職員がJOCVの役割りを理解していても、JOCVの活動に対して5つの部門をかかえている(又、それが彼らの評価・給与・地位とに関わってくる為)彼らは完全には協力でき得ないのである。JOCVのように一つの部門のみを担当するというようにはいかないのである。

b) 財政の問題

もう一つ、入植地でのJOCVの活動の大きな障害になった事柄はお金の問題であった。これは幼稚園が開発部事業の中で、婦人会・宗教学校などの事柄と比較して優先順位が低い為であった。そしてまた入植者の認識に低さの為、多くの幼稚園で月謝滞納という状況があった為であった。

終章

先に述べたことは、JOCVがFELDAにおいて11年間、技術移転を行う上で通りすぎなければならなかった問題の一部にすぎない。

多分、JOCVをいらだたせ悲しませた問題がもっとたくさんあったであろう。

たとえ上記のような全ての問題を阻止しえなくても、堅い協力関係を結んだことによってJOCVとFELDA 開発事業部の職員は共に目標へと達成することができたのである。

又、入植者、開発部スタッフ及びJOCVの間にしだいに良い関係が芽生えたことにより積極的な協力を得、JOCVのFELDAにおける活動は大きな成功をおさめるのにいたったのである。

たとえば野菜栽培の部門では、5-6名のカウンターパートが日本での研修の機会を与えられた。

彼らは現在もINPUT、Kalabakan Sabah の訓練所において入植者やFELDAの職員に野菜栽培の指導にあたっている。

手工芸の部門では、Adela工芸センター・各地にある婦人活動協会等JOCVの指導を受けた所は就熟した技術を持つようになり、製品はFELDAの販売部を通して販売されるまでになっている。

幼稚園部門に関してはわずか2名のカウンターパートが日本での研修を受けたにすぎない。JOCVに指導を受けたことによってもっとも大きな益を得ることができた人々は、幼稚園教諭、カウンターパートである開発部職員そして子供達であった。

現在FELDAは国家開発省社会開発部（KEMAS）へ幼稚園を委託してしまったが、幼稚園及び教師の質の高さは、KEMASからも認められており誇りと感じている。

この事業の成功は、現場の教師と開発部職員のたゆまぬ努力とドイツ・ボランティア・日本のボランティアとの協力と指導の賜である。

隊員の自己評価

協力隊活動の詳細でのべた通り、種々の問題はあったが、全体的に見て幼児教育協力活動は成功であったと思う。

成功に到った要素として以下の事が挙げられる。

1. FELDA本部の積極的な支援
特に一貫して、幼児教育/幼稚園業務管理を担当してきたエサビー女史の11年間の協力。
エサビー女史は初代から最後の隊員までかかわっており、本人もイギリスで幼児教育の勉強をしている為、いろいろな面に渡りJOCVの強力な力になってくれた。
11年間一人の人が、一貫して幼児教育とJOCVにかかわり、技術移転が行われたのはこのプロジェクトが成功した大きな要因である。
2. 各配属先の協力
地方事務所、ASDO、SSD、SDA、現地教師、入植者（保護者会）等の活動支援。
3. 協力隊事務局の協力
隊員支援経費申請承認、幼稚園教諭会議の許可、地方巡回指導支援、活動に関する指導相談等。
4. 技術顧問の隊員活動に対する助言と、現場視察指導、問題提起及び解決策提案。
5. 歴代にわたる隊員のチームワーク

11年間・・・口で言うのは簡単だが、実際の現場で活動していた隊員には、11年間で20年位に思えたり、5年位に思えたりするだろう。

宗教や習慣の違いで、思うように計画が進まず、何度も悔しい思いをしたが歴代隊員や隊員同志、協力隊事務所、FELDAの担当職員等の、はげましも協力で良い成果が挙げられるようになった。

近年はFELDA側が積極的に幼児教育に取り組むようになり、種々の講習会（中央訓練所、入植地サイド）も充実してきた。

内容については、改善を必要とする点がいくらかあるが幼児教育を学んだことのあるスタッフ、カウンターパート研修で日本の幼児教育を学んだスタッフ等が中心に創意工夫をしながら進めている。内容に関しては、マレーシア国の教育方針である「読み・書き・算数」が中心になっており、我々隊員のモットーである「遊びながら学ぶ」の理解までには到っていない。

しかし、歴代隊員の影響で現場の教師の間では、僅かながら理解するものも出てきている。

保育技術に関する活動は11年間の活動の中で、又は種々の資料等で十分に行われてきたと思う。これからは、教師の質の向上（技術面だけではなく教師としての資質）に重点を置いて欲しい。教師の質が上がれば自然に保育の技術も向上するものと思われる。

11年の間に得た種々の活動を基本にして、自分達で考え、工夫してマレーシアに合った幼児教育内容を見つけていくことを期待する。

マレーシア国の幼児教育に対する提言

マレーシア国の幼児教育に対する提言

マレーシアでは政府が打ち出したWAWASAN2020構想（2020年に先進国入りをめざすビジョン）に基づき、新経済政策・国家開発政策・OPP2(The Second Out Line Perspective Plan)・第6次マレーシア計画とが発表されている。

国家開発政策の中で均等のとれた発展を目指し、

- － 相対的貧困の減少と絶対的貧困の撲滅
- － ブミプトラ（土地の子の意）商業産業社会の早期育成
- － 民間部門の役割協調
- － 人的資源の開発

が重要課題として掲げられている。

又、第6次マレーシア計画では、経済転換は資本や技術のみならず人的な質の向上に負うところが大きいとしており、

- － 社会構造の再編成の過程で教育訓練を通じ、所得格差や雇用の不平等を是正する必要性
- － 将来を担う青少年が経済環境の変化に対応でき、勤勉・献身的で創造力があり、高い勤労倫理を有する様努力する必要性

が説かれている。人的資源の開発は、第6次計画の最も重要な部分であり、経済の発展を達成する為には、教育や訓練を受けた労働力を必要とし、これに対し高い優先度を与えている。

以上のマレーシア‘WAWASAN2020’構想に基づき、マレーシア国における幼児教育のあり方について提言を行いたい。

まず「三つ子の魂百までも」の言葉の通り、幼児期が生涯にわたる人間形成の基礎を培う時期であることを踏まえ、幼児によりよい保育環境を与えることに留意せねばならない。

よりよい保育環境の基本とは、

- 1) 幼児が安定した情緒の下で自己を十分に発揮できる環境であること。
- 2) 幼児の自発的な活動を通して心身の調和のとれた発達を培うことのできる環境であること。
- 3) 幼児の発達には個人差があり、幼児一人一人の特性に応じ発達の課題に即した指導を行える環境であること。

であり、これに基づいて幼稚園生活が展開されなければならない。

次により効果的に幼児教育を行う為の条件を挙げると、

- 1) 情緒・社会の育成を踏まえた早期教育を行うこと。
- 2) 子供の発達段階に即したカリキュラムを編成すること。
- 3) 設備・施設面等物的環境を整えること。
- 4) 幼児教育に関する専門知識・技術を有する教師を登用すること。

マレーシア国においてこれらを満たす為には、就学前教育（幼稚園）における法的制度（またはそれに基づく教育要領・設置基準）の制定が必要である。

例

教育要領 - 保育の目的
保育内容
カリキュラム
入園児の年齢
1日の保育時間
年間保育日数

設置基準 - 建物（保育室・遊戯室・職員室・トイレ・手洗い等）
敷地・水・採光について
保育室の大きさ（幼児4名について3.3㎡より小さくないこと）
設備面の規定（机・イス・固定遊具・移動遊具）

一方、幼稚園の知識・技術を有する人材の育成として幼稚園教員養成の機関の設立が強く望まれる。現在のマレーシア国は公的幼稚園教員養成機関がない為、教諭の身分保証がなく不安定な状況である。又、学校としてのシステムが整っていない為、政府の打ち出している教育方針の浸透が難しく、教育の質的向上を望むことのできない状況である。

又、すでに幼稚園は国内にひろく普及されているが、教師の質がそれに伴っていない状況である。将来を担う子供の人格形成に多大な影響を持つ教師の育成が、これからの大きな課題だと思われる。この教員養成機関では、必修課目（児童心理・保育原理・精神衛生等）が統一され、学生が高い保育の知識・技術を持つだけでなく、常に自覚・責任・誇りを持つ一教師となることができるのである。又、幼稚園教諭という資格が明確化されることにより、早期教育の重要性を社会が再認識することとなり、社会教育・家庭教育にも影響を与え向上させることができるのである。

以上の理由により教員養成機関の設立を強く願う。

明日のマレーシア社会を担うマレーシア国の子供達が心身共に健康で、すぐれた社会性・創造性・宗教心を培うことのできるよう、子供の視点にたった幼児教育が行われることを望むのである。

・・・・・・・・世界中の子供の幸福を願いつつ・・・・・・・・

1991年11月

歴代隊員の活動

歴代隊員の感想（思い出）

言葉や生活習慣が異なり、園舎がない、水がない等未知の世界で活動をくりひろげた、幼稚園教諭隊員協力活動11年の歴史を、歴代隊員の方々に以下の要領で募り語ってもらった。

1. 赴任した当時の状況（活動一般に関する事）
2. 活動を終えた時の状況
3. 活動中苦労した事
4. FELDAへ一言
5. その他

1. 赴任した当時の状況（活動一般に関する事）

第一期（1980～1982）

- ・ 近くの町までの道路が整備されておらず、交通手段もない不便な所であった。幼稚園の園舎もなく集会場を借りて2クラス編成で行っていた。教材・遊具等ほとんどなかったが、それよりも驚いたことは幼稚園教諭の子供達に接する表情のなさであった。保育形態は学校の授業のように子供を並ばせ座らせてA、B、Cの合唱をしていた。
- ・ 園舎は既にあり、ドイツボランティアによる中央訓練所での研修経験を持つ中堅レベルの先生がおり、豊かではないがそれなりの工夫と努力が感じられ好感もてる状況であった。しかし教え方がパターン化しており、教師自身が考え創意工夫できるような問題の投げかけが必要であると感じた。

第二期（1982～1984）

- ・ 園舎がなくJOCVに係わる（入植地長、SDA、教師）等の理解が得られず、かえって厄介者扱いされ、身動きのとれない状態であった。
- ・ 園舎の構造上、隣のクラスの声がおおる為、子供が集中力に欠け騒がしかった。
- ・ 園舎、教材等がASDOらの方で整備されていた。
- ・ 教師はベニヤ板で教材作りをしていた。クレヨン、紙等の質が悪い為、予算の確保を少しづつ質の良い物を購入してもらおう。

第三期（1984～1987）

- ・ 園舎がなく、園児が50名とすし詰め状態であった。又、先生がムチを持つというような押しつけた保育であった。
- ・ 前任者がいた為JOCVの認識もあり、教師も意欲的に取り組んでくれた。反面、受け入れ先に技術面というより資金面での期待感があったような気がする。
- ・ 幼児教育に興味を持って仕事をしている教師は数少なく、公私混同が多く見られた。
- ・ 赴任した入植地は10年以上経っている所で、立派な園舎に教材・遊具も一応あった。しかし、教材づくりや1日の時間の使い方などに教師自身の工夫がほとんどなかった。
- ・ 開園してまもない幼稚園・・・あるのは園舎だけで水、固定遊具、教材そして幼児教育の知識とゼロからのスタートであった。受け入れ先は、園の整備に期待を寄せていた。
- ・ 園舎ができあがっておらず、入植者の家を借りて保育を行っていた。狭い部屋に35名の園児がおり、床に寝転がって字や絵を書いていた。

- ・ 受け入れ先の期待が大きく、現地のやり方を見てからふさわしいカリキュラムを作成しようと考えたが、地方事務所や入植地長からすぐにも計画案を提出せよとせつつかれて非常に困った。
- ・ 幼稚園教育要領もすでにあり、大きな事に対してはあまり手出しする必要のない時期であった。
- ・ 教師は研修経験のない人ばかりで、基本的保育方法もわからないという有り様。先輩隊員の作った指導書を中心に、支援システム（婦人会活動、協同作業、事務所）内容の充実をカウンターパートと共にやっていた。
- ・ 教師の状況は、園児達の興味や関心にはおかまいなしに、一方的に教えるといった状態で系統だった保育内容ではなく、以前に中央訓練所で覚えたものを、なぜそれをするのかもわからず園児達に教えていた。
- ・ 入植者が入ったばかりの場所であり、園舎がなく集会所を仮園舎として使用していた。教材がほんのわずかであり、経験のない先生達はとびまわる子供をただ追いかけて叱るという状況であった。

第四期（1987～1991）

- ・ 地方事務所管轄内での活動が認められ、一つの入植にとどまることなく管轄内（10ヶ所の入植地）の幼稚園巡回指導にあたる。
- ・ 赴任する以前のJOCVとの密な打ち合せにより、初めての受け入れにもかかわらず、受け入れ先の態勢が整っていた。園舎がなかった為教材・教具作りからとりかかり、講義・理論的なことは4ヶ月経ってから始めた。
- ・ 幼稚園教諭2代目として赴任。前任の活動期間が1年だけで、その後1年半も空いていたので、かなりもとの状態に戻っていた。幼稚園の先生方にはJOCVの方針が少し理解されていたが、SDA等のPELDA側の理解はまだまだ得られていなかった。

中央訓練所の状況

- ・ 研修所において音楽リズム、絵画製作等の面を担当し、地方から来た教師に接し楽しかった。
- ・ JOCVと長くかかわっているのに、単なる代替教員的な位置にあった。短期・長期のコースがあり幼稚園コースの教員もいたが、幼児教育専門家がいらないような状態だった。
- ・ 現地講師の指導法やカリキュラムのいい加減さに驚いた。

2. 活動を終えた時の状況

第一期（1980～1982）

- ・ 先生が子供と一緒に遊ぶようになり、指導も子供の興味・関心を引くことを中心に進めるようになった。又、家庭訪問を行う等仕事への積極性が出てきて、仕事に対する自信もついたようだ。
- ・ 各方面のプロジェクトの成果で幼稚園独自の資金を持つことができ、物的環境の整備や教材開発もスムーズにできるようになった。

第二期（1982～1984）

- ・ カウンターパート、入植地長の理解を得ることができ、少しづつ環境整備を行うことができた。
- ・ 任期中に新園舎の完成を見ることができた。

- ・ コンプレックスの勉強会が行えるようになり、教師同志の情報交換によって刺激を受けるようになった。 隊員が配属された地方事務所管轄の幼稚園への技術移転は、勉強会を利用するのが最適だったが、任期終了の為それを後任にまかせた状況であった。
- ・ 作成した指導書を使い教師達に指導を始めたところであったが、まだまだ理解できず保育を進めるうえで問題があった。

第三期 (1984 ~ 1987)

- ・ 父兄の協力を得、遊具を少しずつ増し、幼稚園らしくなってきた。
- ・ 先生達の教育意識が高まり、目標にそった活動内容のカリキュラムを作成することもできるようになり、遊びの中から教えていくという面もでてきた。
- ・ 教師達は研修を終え、保育の手引きや、参考資料などもできて、地域での勉強会も少しずつ身につくようになってきており、実際に作った教材を使いこなし工夫する力も身につけてきた。
- ・ 出席簿の発行、クリニックでの毎月の身体測定・家庭訪問・社会見学が恒例になって、先生や父兄との交流が見られた。
- ・ 一園だけでなく、地方事務所管轄の12の園に対し勉強会を開き、そのフォローの為巡回指導を行うようになり、最後に公開保育を行った。
- ・ 教師も中央訓練所より戻り、少し保育に自信がついてきた。一方で園舎・園庭ができあがり教師も研修を終えたという結果、教育内容の充実や子供一人一人の発達に対する問題へ意識をむかせない状況を生んだ。

協力隊員としてほんの少しきっかけを作ったにすぎないが、入植者がこれをどのように理解して生かすことができるのだろうか、という不安を持ちつつ活動を終えた。

第四期 (1987 ~ 1991)

- ・ 地方事務所主催の研修会として、月一回公開保育を行う。
- ・ 中央訓練所での研修を受けていない教諭がいた為、一つの園に最低一名は研修を受けさせるようにした。
- ・ マレーシアの幼児教育にかかわる全ての人に対して、幼児教育に関する知識と理解を深める為の幼児教育セミナーを開く。
- ・ 始めのうちは幼稚園に関しての知識・経験・関心があまりなかったASDOだったが、一緒に活動をしていくうちに次第に理解を示すようになり、活動を終える頃にはかなり幼稚園に対して力を入れるようになった。この背景にはASDOの為の幼児教育研修会やセミナー等が大きく影響している。

中央訓練所の状況

- ・ JOCVのクラスの進め方が定着し、中央訓練所の講師達は、これからは自分達でやっていきたいという気持ちを持ち始めた。
一度、JOCVなしで中央訓練所の研修を進めてみようということになり、資料の整理を行った。
- ・ ASDOの講習会が行われこれから良い方向へ向かうのではないかと期待していた矢先、FELDA内の異動が激しくなる等、不安定な状態となり講師達も幼稚園以外の仕事が増え、混乱し集中できなくなってしまうように思える。

3. 活動中苦労した事

第一期 (1980 ~ 1982)

- ・ 教材開発・環境整備にあたって、資金が全くなく経済的基盤を作るべく、いくつかのプロジェクトを実行するなど運営面にも取り組まざる得なかった。
- ・ ASDOやカウンターパートがマニュアル通り行うことに固執しがちで、子供を最も知る先生の意見や考えが全く反映されない状況を変えることが課題だった。
- ・ 地方事務所単位の講習会を開く時、ASDOとなかなかコンタクトがとれず困った。
- ・ ドイツボランティアの影響を強く受けて、どの園でもコーナー方式に遊具が並べられていた。しかし、これらの教材が使いこなされていないが多かったので、JOCVは教師の指導の方法、指導案の作成に力を入れてきたが、FELDA上層部に理解してもらうのに苦労した。

第二期 (1982 ~ 1984)

- ・ 任地と地方事務所が遠かった為、コンタクトがとれず困った。
- ・ 行事に関する認識の違いから、子供中心の行事の進め方、目的を理解してもらうのに苦労した。
- ・ AJK (幼稚園運営委員会) の長と他のメンバーが仲が悪かった為、いま一つ思うような協力が得られなかった。
- ・ 現地の人々との時間の感覚の差に戸惑った。

第三期 (1984 ~ 1987)

- ・ FELDA本部、中央訓練所、地方事務所と入植地との間で生じるコミュニケーションギャップ、連絡遅延で事を進めるにあたり必要以上の時間、労力が必要とされた。
- ・ 幼稚園教諭隊員のみで20名近くおり、その間での意識の違い。
- ・ カウンターパートがいつも入れ替わり立ち替わりで安定せず、意志疎通に時間がかかった。
- ・ SDA、教師達の意見・要望を地方事務所のASDOが理解してくれなかった。
- ・ 言葉と習慣の違いからくる考え方のギャップに、時々イライラすることもあった。
- ・ 地域の中で教師は一主婦でしかない為、地域の人々との生活のかかわりの中で幼稚園が公共性のあるもの、教育の機関であることをアピールしていくことが大変だった。
- ・ 先生達の意識 (子供と一緒に活動しようという意欲がない) を変える事に苦労した。
- ・ カウンターパートが多忙な為、一緒に学習会に参加できず、子供の教育という面であまり理解してもらえなかった。
- ・ 入植地長に幼稚園の重要性を理解してもらい、協力を得るまで時間がかかった。
- ・ マレーシアの習慣にあったものごとを考え、なかなか活動をしぼりきれなかった。
- ・ 幼稚園教諭として自分の知識の限界を感じた。
- ・ FELDA本部と中央訓練所、入植地とJOCVの間にはさまれ、相方の誤解をとかなければならないことがあった。
- ・ 現地スタッフと、一つのをいかに協力して作りあげていくかという過程が活動の中心であり、この点においていろいろ失敗を繰り返した。

第四期 (1987 ~ 1991)

- ・ 考えは理解してくれるのだが、FELDAという組織の中での活動ゆえ、理解されたことでも実行されなかった (予算面)。
- ・ ASDOが入植地に居なかった為、連絡をとるのに苦労した。
- ・ 7つの園の巡回指導にあたり、移動手段を確保するのに苦労した。
- ・ SDA、ASDO、入植地長などに幼稚園のこと、幼児教育の重要性を理解してもらうのが一番難しかった。

- ・ いくつかの入植地の統合園だったので各入植地の考え方があわず、幼稚園の先生達の活動もバラバラになりがちで、それをまとめるのが大変だった。

4. FELDAへの一言

- ・ ドイツボランティア・JOCVを通していろいろな幼児教育のあり方をFELDAは感じとったと思う。これからは、これを踏台にして試行錯誤しながらFELDA独自の幼児教育を作りあげて欲しいと思う。
- ・ 隊員時代は不平をもらしたり、苦言を呈したが、今は自分を含め42名もの隊員を育てくれたことに感謝している。
貴重な経験をつむことができた。又私達JOCVからも得るものがあったと思っただけのなら、これに勝る喜びはない。
- ・ FELDAもJOCVもお互いに手探りの時期だったと思う。
マレーシアの事情もよく理解できていない私達に、素晴らしい経験を与えてもらった。
- ・ 隊員の任期が2年だけということで、FELDA本部での会議で提案される隊員の要望への反応が今一つ真剣さに欠けていたように思う。Social部門の人事のあり方も、その原因だったように思う。
- ・ 幼稚園が、FELDAの手から離れることになり、とても残念に思う。今まで、上層部の考え方等がなかなか末端までゆき渡らず、大変だった中で先に立つ方々が常に前向きに努力し、JOCVや幼児教育に理解を示していた姿が印象的だった。
- ・ 現在の日本でも問題になっているが、やはり技術のみではなく教師としての素質をきちんとそなえた人々が教師になるべきであり、そういう人を養成する機関が必要である。
それも2年から4年の短大、又は大学で教育の基礎を学んでその上に技術がプラスされるようなシステムになることが望ましい。
早急には困難でも、せめて研修を受けて初めて幼稚園教師になるようにすると、子供の為にも良いと思う。
- ・ 中央訓練所での決定事項を各入植地へ浸透させて欲しい。
- ・ 教師養成所の充実をはかって欲しい。
- ・ 教育の大切さをいち早く感じ、それを取り入れFELDAなりに行おうとした事は、素晴らしい事だったと思う。現在、民営化の道を歩みはじめFELDAの中の社会部門（教育関係）がなくなるのは寂しく感じる。これまでの努力には諸々の事があったが敬意を表示したい。
- ・ マレーシアでの活動・生活の場を与えてくれた事に感謝する。
- ・ 開放的な入植地だったので、とても仕事のしやすいところだった。
- ・ JOCVがまとめた本や今回のまとめを心にとめて、有効に活用できるように人材の確保・引継ぎ等を行って欲しい。
- ・ 研修する場を作り、前向きに取り組んで欲しい。
- ・ 表面的なものだけでなく、幼児教育の基礎を重要視して欲しい。
- ・ 幼児教育について知識の豊富なスタッフがFELDAの中には多くいる。民営化に伴い、組織がどのようになるかは私にはわからないが、この知識をうまく生かすことはできないだろうか？
(例：KEMASへ職員として派遣する)。
- ・ 幼児教育にはこれで終わりということがない。その時代によって子供のまわりの状況が変化し、幼児教育の内容も質的に変化していくものと思われる。
より良い内容の教育カリキュラムが常に研究され、幅広く子供達に還元されるよう願っている。
- ・ 単にJOCVを要請するのみでなく、要請した以上は活動しやすいものにしてほしかった。
(責任なく受け入れている場合が多かったので)

- ・ KEMASと協力してより良い幼児教育法を確立していくことを望んでいる。
- ・ 幼稚園をKEMASに委託した後も幼児教育の重要性を認識していて欲しい。
- ・ スタッフは目に見える技術的なもの（テクニックなど）の援助を強く求めていたと思う。幼児教育の重要性をもう一度考えて欲しいと思う。
- ・ KEMASに委託されたが、すべてをKEMASに任せるのではなく、FELDAの幼稚園の良い部分を育てていくことを願っている。
- ・ エサビー女史はじめ、スタッフの方々の協力に感謝する。
- ・ 今後の発展を祈っている。

5. その他

- ・ JOCVが僅かな期間、幼稚園にかかわっただけで目に見えて変わるとは思わないが、カウンターパートや先生達が創意工夫ができるようになれば、幼稚園もかわると思う。
- ・ 任期の後半一年は、JOCVの指導書作りが主な活動となった。その指導書は未熟だが当時の先生方には手引きとなり、FELDAとJOCVとのつながりの為にも一つの方向が見えたことが収穫だった。
- ・ 任地から戻ってだいぶ年月がたったが、結婚したことを機に思いきって2人で入植地を訪ねてみた。
私にとっていつでも訪ねることのできる友人達がいるということが、何よりの宝である。
- ・ 現在日本では、「裸足保育」が重視され、取り入れている幼稚園もたくさんある。
マレーシアではわざわざ靴を脱がせなくとも、自然の中で裸足でゆったり伸び伸びしていた子供達の姿を思いだし、物質的に豊かであるが何かに追いかけている日本の子供達と、どちらが幸福かしら？と考えさせられてしまう。
- ・ 私にとってマレーシアの入植地での生活は、様々な経験をさせてもらいました友達もでき、有意義な2年間だった。
我々の活動を通し、FELDA側に多少なりとも幼児教育についての問題意識を目覚めさせることができたのであれば、決して無駄ではなかったと思う。
- ・ 帰国して2度任地を訪れたが、その度に幼稚園が発展しているようでとても嬉しく思った。
カウンターパートに感謝している。自分のしてきたことはウソではなかった、わかってくれたんだと改めてFELDAのみなさんに感謝した次第である。
- ・ たいした仕事はできなかつたけれど、マレーシアでの2年間はとっても貴重なものだった。
あの感動を日本では味わえないことが寂しいこの頃である。
- ・ 私が残せた物なんてごくごくわずかでしょうが、それでも私の存在を覚えてくれている人がいるというのはとても嬉しいことだ。
- ・ 私の任期は、10年の歴史を持つ幼稚園教諭隊員の終わりの時期であった為、その積み重ねられた活動をひしひしと感じながら、自分の活動をしたと感じる。
過去の隊員が苦勞してきり開いた上に、私の活動が成り立っている。
今までの隊員が築いたFELDAへの信頼関係のおかげでとてもスムーズに活動ができたと思った。
- ・ 2年間良い経験をしましたが、日本とマレーシアの関係もいろいろと考えさせられた。
- ・ 各入植地の中でJOCVが点として一人で活動するだけで終わらず、11年間42名の隊員の活動が線や面へとひろがった。最終的にはセミナーの開催や報告書作成につながり積み重ねの大切さを感じた。今後はマレーシアの人達の手で一層前進していくことを願っている。

(お詫び : 文章編集にあたり、原文を一部カット・変更させて頂きました。)